報特攻会
平成16年2月
第58号

〒105-0001　東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人　特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電　話　03(3432)1090
ＦＡＸ　03(3432)5567

編集人　田中賢一
発行人　菅原道熙

陸海軍航空特攻将校搭乗者の主体は、学徒出身者だった。

代々木国立競技場にある学徒出陣記念碑の碑前祭は、本年をもって終りとなるが、この歴史的史実を忘れてはならない。

学徒出陣記念碑建立10周年記念集会

特操二期　田中市郎衛門

ペンを捨てて戦場に向かってから六〇年、平成15年10月21日、澄みきった秋晴れのなか、国立競技場周辺には会場に急ぐ人の波が目立った。

碑前集会は今回の建立10周年記念の集会をもって終了ということから世話人も人員増を予想して準備をしたが、予測を上回り参加者が三五〇人に達したため、用意した記念品が不足する始末であった。

正午を期して全員が碑前に集合し、征って還らなかったご英霊と戦後物故された戦友を偲び黙祷をささげ、続いて特操三期熊航会の渡辺槇夫世話人が「我々は皆、齢八〇才の大台にのりました。一致して行動を続けることは、体が重くなりました。戦争の実相を後世にむけて語り続ける気概を保ちつつも、碑前集会は今回の建立10周年記念の集会をもって終りとします」と挨拶があり、別の世話人から「この碑は既に文部省に寄贈しており、国立競技場が管理しているので今後もこの地に存在しますので皆様今後も宜しくお願いします」と付言された。

引続いて懇親会は場所を競技場の大会会議室に移して開催された。まず半藤一利（作家）が紹介された。半藤さんは戦時中、東京から長岡に疎開され、山本五十六元帥の出身校である長岡中学校から東大を経て後に文芸春秋の編集長となり、十五年前から作家生活を続け、ノモンハン奮戦記ものを執筆されている方である。今日の演題は、「特攻作戦は如何にして策定されたか」という題であると紹介された。

サイパン島の玉砕など戦局が悪化した昭和19年10月「元帥会議」がもたれた際、伏見之宮殿下が「何か特殊兵器を開発しては如何」と奏上され、特攻機に発展した話や、海軍の大西中将が第一航空艦隊司令長官に就任された昭19・10・20の直前の11日間に、当時、南西方面司令部付であった同中将が源田実中佐と協議して神風特別攻撃隊を誕生させたくだりの話など興味ある講演であった。

直会に入り特操三期熊航会の大山忠作氏（日本画）が乾杯の指名を受けた。碑の揮毫者でもある同氏は同じ三期の元靖国神社の大野宮司のすすめもあり、その書を遊就館に奉納させて頂いたと挨拶されたあと乾杯の音頭をとられた。会場は陸海のこだわりもなく終始和気あいあい、和やかな空気につつまれ、最後は全員が肩を組み同期の桜を合唱し再会を約しつつ会を閉じた。

さて、この日は学徒出陣六十周年の記念すべき日にあたり、出席された戦友は等しく雨でぬかるんだあの昭18・10・21の出陣学徒壮行会を想起されたと思うが、学徒出陣に係わる出来事のなかでも最も象徴的な行事で現在でもその情景を記録したニュース映画は毎年のように放映されているが、この壮行会を主催した文部省には記録したものは記録映画以外になく、その参加校数や学徒数も同省には確かなものは今では無いようである。

そこで「大東亜戦争公刊戦史」の出陣学徒壮行会の記録のなかに「壮行会は、東京・神奈川・千葉・埼玉県下の

目次

学徒出陣記念碑集会 ……1
あの人が特攻戦死より五十八年……3
世田谷特攻観音祭文ほか ……6
慰霊顕彰の行事 ……8
陸軍海上挺進戦隊、回天・搭載潜水艦、特操碑、空挺部隊、若潮の塔 ……11
お知らせ、図書紹介 ……12
特攻隊補給品の空輸 ……15
今期の戦史④十二月八日の作戦……18
ある偶然のきっかけで思うこと……19
宇垣纏の戦藻録抜③ ……24
靖国神社初詣の記 ……

七七校の出陣学徒のほか、男女送別学徒一〇七校の六万五千人が参加した」と記録されている。当時伏せられていたが、神宮競技場の出陣学徒の数は約二万五千人といわれている。同じ頃、全国数ヶ所で壮行会が催されており、蜷川寿恵著「学徒出陣・戦争と青春」のなかに陸軍三三、六〇二人、海軍一四、二八〇人計四七、八八二人の推計はどれも有力なものとして特筆されるもののようである。まして戦死者の数に至っては全く把握できないので関係している航空関係は次のとおりである。

区分		入隊年月日	入隊数	戦死者	特攻(再掲)
陸軍	特操二期	一八・一二	一、二[illegible]人	一三九人	七六人
海軍	飛行予備学生一四期	〃	[illegible]	四[illegible]	一九九
同	飛行予備学生一期	〃	一、九七四	一六五	三七
計			六、四九五	六一四	二七二

因に学徒出陣を待たず、十八年十月に入隊した特操一期二五〇〇人は戦死七〇一人（内特攻二三二人）、同年九月に入隊した海軍飛行予備学生十三期四九八八人は戦死一六〇七人（内特攻四四七人）であった。

この他、特操二期と同じ十二月に入隊したが、教育施設の関係で予備士官学校を経て19・4特操三期に採用された一五〇〇人がある。

次世代への伝言
—出陣学徒壮行碑に寄せて—

昭和十八年（一九四三）十月二日、勅令により在学徴集延期臨時特例が公布され、全ての大学、高等学校、専門学校の文科系学生・学徒の徴兵猶予が停止された。この非常措置により同年十二月、約十万の学徒がペンを捨てて剣を執り、戦場へ赴くことになった。世にいう「学徒出陣」である。

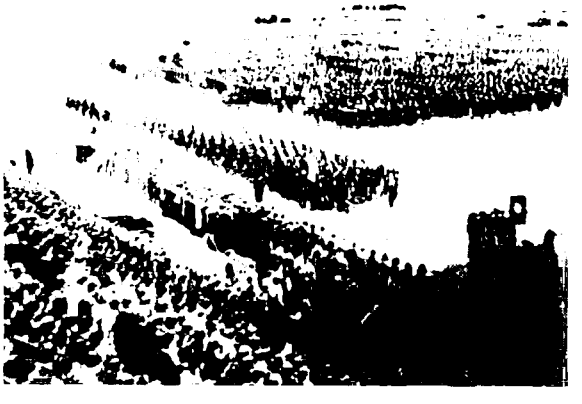
全国各地で行われた出陣行事と並んで、この年十月二十一日、ここ元明治神宮外苑競技場においては、文部省主催の下に東京周辺七十七校が参加して「出陣学徒壮行会」が挙行された。折から秋雨をついて分列行進する出陣学徒、スタンドを埋めつくした後輩、女子学生。征く者と送る者が一体となって、しばしあたりは感動に包まれ、ラジオ、新聞、ニュース映画はこぞってその実況を報道した。翌十九年には徴兵適齢引き下げにより、残った文科系男子および女子学生も、軍隊に或いは戦時生産に動員され、学園から人影が絶えた。

時流れて半世紀。今、学徒出陣五十周年を迎えるに当り、学業半ばにして陸に海に空に、征って還らなかった友の胸中を思い、生き残った我ら一同ここに「出陣学徒壮行の地」由来を記して、次代を担う内外の若き世代にこの歴史的事実を伝え、永遠の平和を祈念するものである。

平成五年（一九九三）十月二十一日

学徒出陣五十周年を記念して

出陣学徒有志



航空特攻将校搭乗者の79%は学徒出身だった。

航空特攻搭乗者数

	陸軍	海軍	合計
総数	1,337	2,516	3,853
将校	596	780	1,376
学徒出身	426	664	1,090
下士官・兵	741	1,736	2,477
学徒／将校	71%	85%	79%

准士官は下士官の数に入れた
陸軍の幹部候補生出身者も学徒出身に含ませた

あの人が特攻戦死してより五十八年
最近思うこと

小栗　楓子

編者註　投稿者は第一〇五振武隊長として、20年4月22日知覧より出撃、沖縄西北海上で敵艦に突入した林義則少尉と将来を約した人で、「愛は終わりなく」の著があることは、会報41号と56号（15年8月）で紹介した。特に56号ではその内容に触れておいたので重ね述べないが、まだ残部があるので心ある人は購読されたい。頒価二〇〇〇円

一、贈られた『特攻』に寄せて

「特攻」第57号を読みながらペンを執る。が、なかなか最初の文が書き出せない。どなたかの句に〝拝復と書くまでながき、ふところ手〟というのがあったことを思い出しながら思案している。「特攻」に載っている大方の文章の様に華々しく戦った記事が書けるわけでは無し、やはりどうしても故人に繋る何かを書くことになってしまう。

57号一頁の第十八金剛隊、井上啓

〇砕けても戦の空にただよはん　みなみの風を我が声と聞け

又20頁　第1神雷部隊桜花隊　緒方襄

〇死するともなほ死するとも我が魂よ　永久にとどまり御国をまもらせ

他にも良く載っている身は砕けても魂魄は止まりて国を護る。の心、言葉を読む度に思うことは戦死者は皆同じ気持ちだったなぁと言うことである。

56号の協会頒布図書のおしらせとして最後の頁に載っている「第一〇五振武隊林義則少尉」この写真は満洲より故郷の父母宛てに送って来た小さな写真で裏に『肉体は消えても我は御戦の勝つ迄は戦場の空を飛びます』。と書き、傍に小さな字で『この写真引伸ばしておいたらと思ひます』と書いてあり、自分で思うところあって書いたと思われる。

たまたま57号の井上啓氏作と緒方襄氏作の遺詠を読んで故人の写真の裏に書いてあった言葉を思い出し、あの時、次々と戦死していった人々の心中を思い浮かべている。この写真は、故人の言葉どおり戦死してから引伸ばして何枚も焼増して使うことになる。私も持っていて、本の扉の写真にもなっている。

隼会と名付けた戦友会があり招かれて出席した時、少飛出身の人が「この写真僕が写したのです。左腕の手袋の下に見える煙草は上等のドイツ製のものです。」と話された。常々手の指が特に大きく長く写っているなァと思って眺めていたものだが、

煙草つまむ指の先にも表情があり　ふれしことなき指先きなれど。

これは戦死した当時詠んだものだけれどその後何年か経ってから思ったことあり。それは与謝野晶子氏の短歌、

やわ肌の熱き血潮に振れもみで　淋しからずや道を説く君

この短歌は戒律厳しい修業僧のことを思って詠まれたのだけれど……。修業僧でもあるまいし、あんなに心深く通じ合った二人だったのに一度も逢うことも無く逝ってしまうとは、淋しいことだったなァと年を重ねた今、思われる。淫らな話としてでなく人として正常なこととして詠み捨ててほしい。

話しが横路にそれて茶畑に入りそうだから元に戻して、

戦死した人達は皆々勝つためには自分達はゆかねばならない。せめて魂魄は残って、と願っていたであろうのに…。

最近刊行された「ねじ曲げられた桜」と言う本を求めて、まだざっと目を通したのだけれど著者は津田塾卒業後、アメリカの某大学で博士号取得、アメリカ学士院正会員とか、怖ろしい様な肩書のある女性で内容は随分とへチむずかしく、簡単に評することも出来ないけれど、あの昭和十八年の学徒出陣の時入隊して特攻戦死した人達の手記を何冊か読み、彼等は最高学府在学中の当時の最高のインテリだった筈なのに何故易々と国の犠牲になったのか、何故政府に逆らうこと無く自分を捧げたのかと、その過程に迫ったのだ、とある。自分の意志がどうあろうともそれに抵抗を許さない程の当時のナショナリズムのすさまじさは思いやられる。私も『きけわだつみのこえ』を始め『わがいのち月明に燃ゆ』『くちなしの花』等、発行された当時、一生懸命に読んだものだが、今ここへ出してきて、少し読み直しているが、確かに十八年に徴兵猶予が廃止になり学徒で出陣した人達は、強制させられて自分達の意志ではなかったかも知れないが、でも最後は苦悩しつつも自己の心を納得させて国に殉じたのである。優秀な人達を死なせてしまって、とても惜しく、残念に思う。57号20頁にある三人の特攻隊員も学徒出身である。やはり最初に書いたように身は消えても魂は残って云々と言っている。

故人（義則）は学徒出陣した人達とは違い元々学校を卒業すれば徴兵は義

務だったから、入隊は覚悟の上。軍に入ってからも初めからの騎兵でいれば（もうあの頃では）死場所は無かったであろうのに自ら飛行兵に転じているのだから、青年として思う様に生きたのだから、ねじ曲げられたとは思わない。

（唯、あの人が思っていたことと少し違ったのは、陸軍戦斗機で、艦船攻撃を命じられるとは思わなかった。やはり敵機とわたり合うことを思っていた。その訓練をしていたのであろうから）と、これは私の想像。単純かも知れないけれど、とても純粋だったと思う。学友の言葉に、「昭和二十年四月二十二日一〇五振武隊長として知覧基地より出撃し沖縄島北方洋上で敵艦船に体当り攻撃を敢行。壮烈な戦死を遂げた。二十四歳の青年として若き日の倫理を止揚し行動を以て祖国の危機に殉じたのである」。この言葉、私は最高の手向けの言葉だと思う。故人も徴兵検査後、五ヶ月一生懸命に勉強に運動に励んで元気に入隊します。と母上に報告している。そして一ヶ年かかる研究を半年で命がけでやっている。とか読みかけの本を読了したいから、毎日放課後は図書室へ通っている等、皆々真剣に生き純粋に死んでいったのだからとやかく批判すること等出来ようか。

二、短歌のこと

最初に戦死者の短歌を読んで書き初めたこの文章だから短歌のことをもう少し書くとしよう。最近二、三年のお正月の宮中での歌会始めの御題に因せて作ったもの。

平成十四年「春」に因せて。

忘れじな愛しき人を激戦の
空に送りし去りにし早春(はるま)を

（これは自分でもまあまあの出来だと思う。）

平成十五年「街」に因せて

亡き人が空の防衛(もり)と翔びしてふ
異国の街は如何にあるらむ

（中国東北地区長春（新京）の街を思って詠んだのだけれど、お正月のおめでたい場に「亡」の字はまずいと思って推敲しても、何ともならない。応募するのではないからいい様なものである。余りいい作とは言えない。）

平成十六年「幸」

辿り来し八十(やそ)の歳月(としつきい)幸なりし
同行二人の旅にしあれば

（四国巡礼の人は、お大師さんと同行二人と思って歩くのだそうだが、あの人と同行二人の旅の生涯は幸せだった。）御題に因せては何年か前に二、三作ったことがあったがここ暫く遠ざかっていて、又ここ二、三年作る気になってみる。応募したことはないが。

短歌などは、この未熟な自分が、どんなに情景がいいの、どんなに感動したのと言ってみてももう先に古今東西の大先生方、あらゆる人たちによって皆言い尽くされているので、作る気にならない。が、故人のことで作ろうか、と思うと言葉が自然に出て来て（語彙をたくさん知ってもいないので限られた言葉だけれど）短歌の様なものになるから、我ながら不思議に思う。

三、千羽鶴のこと

来年は（平成十六年）知覧特攻慰霊祭が五十回になるそうだから是非出席参拝したいと思っている。生命ある限りは、と思っていたけれどやはり八十才を超えると体力も衰え感も鈍くなって遠出に自信がなくなったので出かけるのももう最後になるやも。それも行けるかどうか心配である。それで無事行って来られる様、それから私があの人のいる彼の岸へ逝くまで安らかに待っていてくれる様、祈りを込めて、一枚一枚と千羽鶴を祈っている。

戦死後半世紀も経ち、お墓参りもご無沙汰がちになっているけれど今年は四月の命日と八月の終戦日の二度訪ねた。墓前に額づいて機上の姿を想像し冥目してお参りしたが、あの人の姿はあの時のままで羨ましい限り。

一言(ひとこと)のねがいを託し碑にそそぐ
水は静かに土にしみゆく

四、故人より父上への最後の手紙

筆まめな人だったので家族への便りもたくさんあった。私が見せてもらったのもあるがあの当時、父上の動務地と生家と両方宛に来ていたので父上が亡くなってから整理したのであろうが、私がまだ見たことのない特攻隊に定ってから父上へ来た手紙を読むことが出来た。今まで来ていた普段の調子と違い特に謹厳、真摯な気持で書いてあり、思わず衿を正して読む。読んでいるうちに五十何年かの時の隔たりが無くなってしまい、今受け取ったばかりのようにあの人の気持と動きが浮んで来て泣けてしまった。その手紙三月十五日附、

後三十分後に今日の訓練を開始せんとす。身を以て指揮。必勝の練武。必ず誓って任務を達成せん。蓋し義則の微力を以てしては、人間業では完遂困難なる任務。この過分の任務を負ふ小官の光栄これに過ぐるなし。ただただ感激。この負託の重きに任せんと朝に夕に神霊の加護を頼み身も心も浄め毅然として陣頭に立ちて指揮しあり。本土空襲激しき折、我の進む道は一つなり。固より必死の任なれば我が身は消ゆるならん。我

の眼中には生死は毛頭なくただ任務達成の信念あるのみ。続く部下に所を無事得しめれば我の本懐之に過ぐるもの更になし。

御両親様、兄上、祖母様　弟達の御健闘、伏して祈る

父上様　　義則。

次のも父上宛。

楠正成が最初に後醍醐天皇の行宮に召され天皇が親しく股肱として賊を打つよう命ぜられた時の忠臣正成の心中が今少し察せられるような気が致します

思えばこの大任、微力義則は悠久の大義に生きる日迄は猛訓練に猛訓練を重ね必ずその負託の重きに任じます。至らぬ乍らも大命を拝したる上は部下に自らの不行届から無駄死を決してさせまいと先輩の訓を本として研究と訓練に全霊を打ちこんでおります。今はもう何も申すことはありません。

皆様、（このあたりより普段の調子になっている）元気で仲よく頑張って下さい。祖父様と逢ったら林家の近況を報告致しましょう。楓には一寸気の毒に思います。が大丈夫でしょう。話が長びいてとうとう間に合わなかったですね。

こちらからはまだ便り出せるでしょうが、父上の便りは三月半ば以降出すのを止めて下さい。皆様の御健闘を祈ります。

御両親様　　義則。

（注）「祖父は日露戦争で戦死」　それであちらへ逝って祖父様に逢ったら林家の近況をお報らせしましょうと。そこで楓のことを思いついた様に、「楓には気の毒に思う。が大丈夫でしょう。」と書いている。私は「君ありて我幸なりし、お前の心を大切に持ってゆく云々」との最後の便りや常々の便りで心配はなかったけれど、それでも重荷になったのではないか、両親に何を言い置いて征ったのかと少し心配があった。けれど「気の毒と思ってくれて、が大丈夫でしょう」と信じて征ってくれたと、これでよかったと安心出来た。五十余年の面影を追っての毎日の暮しだったけれど、この一生に更に悔いはなし。同行二人の旅だったから。

五、引き揚げられた九七戦のこと

暫く御無沙汰していたので平成十三年五月の知覧慰霊祭に参列した。これより前、平成八年の夏のこと、故人の一〇五振武隊の隊員である渡辺利広さんの乗機（九七式陸軍戦闘機）が博多湾から引揚げられて驚いたことがあった。五十余年も海に沈んでいたものでも見るも無惨な姿であったものを、各方面の方々のお骨折りにより元の姿に復元されて大刀洗平和記念館に納り展示されることになったと聞いてよかったと思っていた。それでこの時知覧の帰途大刀洗へ立寄ってその九七戦にお目にかかって来た。勿論九七式戦斗機の本物など見たことも無いけれど、故人が菊池教育隊を卒て満洲の二十五教育隊へ行って初めて戦斗機の訓練を受けたのが九七戦だったと聞き、写真を探して眺めていた。旧式だとは云え（少し胴長で脚は引っ込まないがとてもスマートだと思ってみていた。新しく出来た一式戦より返って操縦し易かったとも聞いていた。大刀洗と言えば古く少年飛行兵育ての地だったので、もっと何とかそれらしい処かと思っていたら、思いの外、私鉄の無人駅で降りて、その駅舎と記念館が一緒になった様なところ、留守番のおじさんが一人で迎えて下さった。見学者も余りなく一つの部屋に少しの遺品、遺書、写真が展示してあり次の部屋にその戦闘機は展示してあった。入って一瞬、息を呑む思い。やはりいくら旨く修復されたとは言え五十年も海中に沈んでいたのだから素人の私が見ても、とても空へ舞い上ること等出来そうもないそっと手で押すだけでばらばらと壊れそうで、あのきりっとしまった胴体の感じなど無くとても哀れに思われた。連れの人も「ずい分水ぶくれしたなァ」と小声で独り言していた。でも修復するに随分御苦労がお有りだったと聞いている。あの無惨な姿から（写真でみたのだが）ここまでになさったこと、大変だったと想像される。

九七式と言うのだから皇紀二千五百九十七年に初めて出来たものと思う。ノモハン事件の頃は新鋭機として活躍し、その後練習機として使われ、最後は足りない特攻機の数を補い、ボロボロになるまで使い果されて、一〇五振武隊員は勿論、全員九七戦であり、第六航空軍より出撃した特攻隊は多く九七戦、もしくはそれより古い機で出ている。途中で漏れる油を浴びて哀れな姿で降りて来て整備員を泣かせたり、整備の人共々随分御苦労な遠征行だったと思う。最後に只一機だけ残った渡辺さんの乗機、九七戦の姿を写真に納めて畑や住宅になってしまっている大刀洗飛行場跡を複雑な思いで後にした。

六、夢に生きて

思うに、いくら戦争だったから、兵役は国民の義務だったから、自ら望んで飛行機乗りになったのだから、任務だから、これが自分の仕事だから。等々

言ってみても、やっぱり死にたくは無かったろうに……。

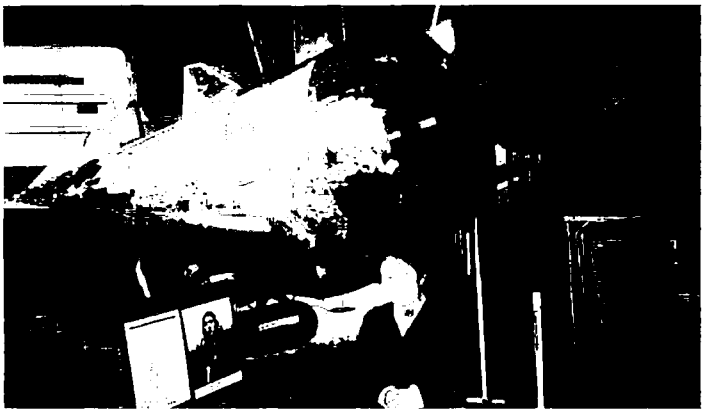
故郷へ、父母の元へ、私の所へ帰って来たかったろうに……。少し見栄っぱりで、泣きごとは決して言わなかった人だったけど色々考えたこともあろう。そんな時眠られぬこともあったと思う。それでもボロボロの飛行機で死んでいったと思うと、可哀想で、自分だけこんなに長く生きて幸せだったなど言うのは申し訳ない。と言ってもあの人の面影があったからこそ幸せだったのだから……。何と結ぶべきかわからなくなって来た。

私の生涯は、夢に生きた生涯だったかも知れない。

短い冬の日も暮れちかく東の山の端にかかった雲が夕日に照らされて紫色に輝いている。阿川弘之作、雲の墓標の中にあった素敵な言葉を思い出した。

雲こそ我が墓標
落暉よ碑銘をかざれ

雲の彼方へ消えていったあの人の碑銘は、やはり美しい落暉に輝いているであろう。美しい光景を眺めながらこの文章も終わりとしよう。



太刀洗記念館にて
九七式戦闘機　一〇五振武隊渡辺利広さんの乗機　平成八年夏博多湾で引上げられ修理されたもの

ここに掲載する二点の文章は、前号掲載の世田谷特攻観音年次法要の際に捧げられたものであるが、紙面の都合で今回となった。

第五十二回 特攻平和観音年次法要祭文

本日茲に第五十二回特攻平和観音年次法要の開催に当たり、謹んで特別攻撃隊烈士の諸霊に申し上げます。戦い終わって五十八年、特攻平和観音の開眼法要が営まれた昭和二十七年五月五日から、数えて今年は五十二回目になります。

すぐる大東亜戦争において戦力の隔絶は如何とも為し難く、戦勢日に日に不利となった戦争末期に、御英霊は特別攻撃作戦において、敢然として御自身の若き肉体を乗機乗船と共に、敵艦船に或いは敵機に体当りされ、或いは敵飛行場に強行着陸し、更には比島では中戦車を以って敵重戦車に体当たりをされて、祖国の為に殉じられました。

その崇高果敢な行為を思う時、私達は粛然として襟を正し、言葉に尽くし得ぬ感動と感謝の気持が、心の底から湧き上がって参ります。

皆様方は日本の将来を残った者に託されて、従容として征かれました。その御遺託にお応えすべく生き残った我々は、皆様が捧げられた尊いお命を心の支えとして焦土から立ち上がり、世界中が瞠目した復興を為し遂げました。

然しながらその蔭で、永年に亘って培われて来た我が民族の道徳・倫理観が蝕まれてきたことに対する適切な対応を怠り、経済不況の到来と共にその弊害が一挙に顕在化して、大きな社会問題になっております。また最近の世界の動きを見ると、半世紀に亘って築かれて来た国際秩序が、再構築される予兆を思はしめるものがあります。

今こそ我々は次の時代を担う世代の方々に対して、特別攻撃隊の皆様が果たされた偉業と、至誠至高の精神を語り継ぎ、歪み混乱した世相と歴史観を正して、在天の諸霊が一日も早く安んじられますことを念じて、より一層の努力をしなければならないと、心に深く誓っております。

在天の御霊に申し上げます、願はくば末永く我が国の将来を見そなわし給うと共に、私共への更なる御加護を賜ります様、伏してお願い申し上げます。

本日の特攻平和観音年次法要に当たり、改めて諸霊の御功績を讃へ、御遺徳を偲び、顕彰の誠を捧げます。どうか安らかにお眠り下さい。

平成十五年九月二十三日

財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
会長　瀬島　龍三

特攻戦没の英霊を称えることば

私が、世田谷の特攻平和観音のお祀りに係わるようになりましたのは、昭和五十二年に「陸軍航空特別攻撃隊史」を世に問うて以来のことであります。今回が五十二回の特攻平和観音年次法要と言うことで、ひとしお感慨深いものがあります。

特攻戦没と言えば、同期生であったフィリッピンでの富嶽隊の曽我邦夫・万朶隊の園田芳巳、沖縄特攻の魁となった伊舎堂用久・長谷川実など凛々しい顔が走馬灯のように思い出されます。彼らはもとより軍人であり、戦友であった私も勿論軍人でありました。当時の軍国主義の権化のような面々であります。戦後の平和志向の風潮から、軍国主義を否定して世情に阿って「特攻平和観音」と平和の文言を入れなければ、特攻観音を護持出来ないものと観念して今日に至りました。

ところが二年前の九月十一日の同時多発テロの発生によってこの考えは一変しました。このテロの想像を絶する捨身体当たりの状況を見て、特攻体当たりと同日に論じる者が現れたからです。アメリカの高官の中にもそのような考えの浅い発言をした者があったように記憶しています。テロと特攻は明確に異なります。

第一にその動機が違います。テロには恨みを晴らす、あるいは主張を暴力によって貫徹しようとするものが大方ですが、暴力は暴力を呼んで際限がありません。現在のアフガニスタン・イラク或いはイスラエルの状況を見ても、それを強く感じるのです。その手段は、関係のない者まで巻き込んで結果がまことに悲惨であります。恨みが恨みをよぶもの必然的な成り行きであります。

わが特攻隊の場合、純粋にわが国の危急を救い父母同胞を危急から守る為に、一身を捨てて難敵に突入されたのであります。相手が最高の攻撃力と防御力を備えていたために、必ずしも成功とばかりは言えなかったのです。それでもその壮烈な攻撃は敵陣営の心胆を奪ったのです。戦果もさることながら、問題の核心は精神のありようであります。「特攻平和観音経」ではその成果を「唯、諸霊を慰め得るもの一つあり。宇内に無慮一百三十有余の独立国家の秩序の出現これなり。真に世紀の偉業。この赫然たるに匹儔するもの果たしてほかにあらんや、これ正に諸霊の志の顕現なり。諸霊の血の発露なり。諸霊や、大仁にして大徳、大勇にして大善なり。」と称えてくるのであります。特攻諸英霊を称えるのに称え過ぎることはありませんが、多くの独立国家の出現は、むしろ大東亜戦争全局の推移の帰結であったろうと考えられます。私が最も注目したいのは、武力を持たぬ我が国が戦後五十八年長きにわたって、平和を保ち得た事実であります。現に特攻隊の英霊は日本の平和と繁栄を護っているのであります。今日の変転する国際情勢下では希有のことであります。これを「特攻平和観音」とお呼びせずして何とお呼びすればよいでしょう。まさに平和の護り神であります。

かつて戦友であった特攻諸英霊はすでに、靖国神社では護国の神であり、ここ世田谷観音寺では特攻平和観音とお呼びする仏様であります。従って私としては、慰霊などと不遜なことは申しません。ひたすらそのご威光に帰依し、諸英霊に恥じぬ行いを心掛けたいと念じるばかりであります。

ここ世田谷観音寺には、六千余柱を数える特攻戦没の諸英霊がお祀りしてあります。実にかくも多くの方々が国の危急に際し、確実な死を前提とする特攻攻撃に参加されたのです。その参加は志願によったにしても、その実行は命令によって済々と実施され、確実な戦果が期待できるよう計画されました。このような戦闘は東西の戦史にその例を見ません。すなわち激情によって志願したにしても、冷静な判断力を基本として実行に移されらのであります。それにも係わらず、このように多くの特攻攻撃参加者があったということは、当時の多くの国民が大東亜戦争の目的の正当性を信じていたからに外ならず、また国家国民の危急は一身を犠牲にしてもこれを護る気魄が国民の間に充満していたからに外なりません。このような高い精神性は無言のうちに世界の国々に畏怖の念を抱かせました。それが現在まで日本に平和を齎せた原動力であります。

無私の愛。屈服せざる気概。それを体現された特攻平和観音のお慈悲が日本の平和を護っていたのです。そして特攻平和観音の精神は世界の平和まで護るのです。テロのように恨みに基づき、無辜の民まで傷つけるような卑怯な攻撃は、決して問題を解決しません。

特攻平和観音の精神こそ世界に平和を齎す根本の精神であることを、ここに高らかに謳い、特攻戦没の英霊の偉業を心から称えます。

平成十五年九月二十三日

戦友代表　生田　惇

慰霊顕彰の行事

手を合わせ石ぶみみれば浮かび出ず
なみまに消えしともがきのおも

陸軍海上挺進戦隊戦没者慰霊祭

海上挺進第三戦隊戦友会
若潮会　顧問　皆本　義博

第十回陸軍海上挺進戦隊慰霊大祭は、広島県江田島町幸の浦で実施された。今年が最後の大祭であり、前日の十月二十一日、広島市ホテルグランビア広島で、全国から五七名の出席を得て、総会を開き、議事では、これ迄の会計報告、監査報告ののち、顕彰会終末に関して、如何に今後を維持するかの提案があり、現在の手持金残高九百万円から、江田島町の教法寺に五百万の永代供養料を托し、ふるさと交流館（マルレ模型等を展示）に五十万残りは大祭後顕彰会報六号に引きあて、残金は碑のある江田島幸の浦地区の方と協議して決することで全会一致で決定した。

翌二十二日は、全員バスに乗車、宇品からフェリーで江田島の切串に上陸、慰霊大祭は快晴のもと、江田島町町長・幸の浦区長等の来賓を得て、遺族・戦友・家族百五名が参加し、戦没者慰霊碑前で、十一時から十二時の間、極めて厳粛かつ盛大に実施された。今回が最後ということもあり、遺族・戦友・家族の想いは切なるものがあり、献花の間涙する人が少なくなかった。

陸軍海上挺進戦隊
回天・搭載潜水艦
特操碑頌徳祭
陸軍空挺部隊
若潮の塔

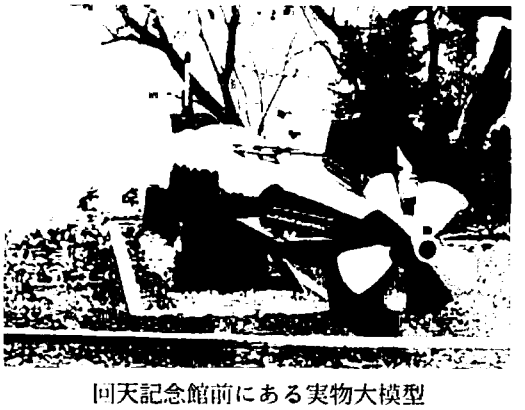
平成十五年度回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員の追悼式

評議員　小瀬　利春

回天作戦で戦没した搭乗員一〇六名、回天を搭載して戦没した潜水艦八隻の乗員八一二名、同回天整備員三五名ほかを追悼する昭和三〇年以来の式典が山口県周南市の大津島で、本年度は十一月九日、地元有志の団体「回天顕彰会」の主催により開催された。

御遺族は北海道から九州まで五十人が参列された。丁度総選挙の当日にあたる上、天気予報も雨であったために、参加者は約三百名と、例年より少なかったが、雨は式典を飾る勇壮な「大徳山太鼓・回天」の演奏が終わると同時に降り始めた。まさに戦没者を偲ぶ涙雨であった。

県、市、陸海空自衛隊や地元諸官庁機関ほか各種団体、企業代表、海軍関係戦友会が参列、式典の半ばには慰霊飛行の海上自衛隊小月教育航空群の三機、同第三一航空群の飛行艇一機、航空自衛隊第十二飛行教育団の五機が頭上を航過した。来年度は回天特攻の初陣菊水隊の出撃から六十周年に当たるので、盛大な式典が予定されている。期日は毎年十一月第二日曜日であり、有志の多数御参加を我々としても希望する。



回天記念館前にある実物大模型

特操之碑　頌徳祭

特操二期　田中　市郎衛門

秋深まる十月十二日洛東の地、霊山京都護国神社において第十七回特操之碑頌徳祭が厳粛に催された。

神社には早くからご遺族、戦友が二年振りの再会を喜びあい談笑に花が咲き、かつての空の戦士も今年は殆どの戦友が八十路を迎えたいというのに話題は往時に戻り、会場全体に心なごむ暖かい空気が漂っていた。当日は快晴に恵まれご遺族三六名、一期七三名、二期二〇名、三期一九名、四期一六名、計一六四名が出席された。

特操之碑は昭和十八年第二次大戦の一大転機に臨み国を挙げての総力戦の下、祖国存亡の危機に進んで身を挺さんとして多くの学徒が陸軍航空に馳せ参じた。志願して採用された私共七、八〇〇名は大戦の最中、任務遂行中に殉職、戦力劣勢の中での空戦、敵艦船に敢行された特別攻撃等により約九〇〇名の同期を失なった。心から祖国を愛し、平和を希求し乍ら散華された英霊の栄誉をたたえその霊を慰むるとともに、特操の果した役割を永く後世に伝承するため昭和四十六年に碑を建立した。

以来隔年ごとに頌徳祭を催し、さらに平成四年には、碑の裏面に戦没された一期七〇一柱、二期一三九柱、三期三三柱、四期二二柱計八九五柱のご英霊名を配した銘牌板を整備し平成十三年には、特操会として永代供養料を神社に奉納したが、これらは総て会員の浄財であった。

今年の頌徳祭は、特操会会員の高齢化に伴い体力の限界を感じ、止むなく本年の催事を以て特操会としての行事は最後にすることと決定し、明年以降は近畿特操会に主催を移し毎年十月の第二日曜の十二時三十分に碑前において催事を継続することが周知されているためか、ご遺族、会員諸兄も心なしか感慨一入のようであった。

式は近畿特操会の平井副会長の司会により、学業半ばにして征きて還らなかった友の胸中を思い黙祷を捧げ、会員一同起立して「同期の桜」を合唱し、神官による神儀が取り行われた。

先ず腰塚会長が「あの敗戦の日から五十八年あまりが経過しました。その間地球上に於いては戦争・紛争の絶える時はありませんでした。この間我が国は英霊のご加護により過去の歴史にない永い平和に恵まれ世界に類例のない繁栄に浴しております。しかし古来我が国の美徳とされた日本人の心、公徳心が薄れ、責任感が無く自己中心に生き、犯罪の凶悪化、低年齢化が進み教育の在り方が再検討される時代となりました。私どもは共に戦い共に過ごした者として英霊の心を語り継いで参ります。特操之碑が建立された当時の佐藤総理は沖縄の返還で日本の戦後は終ったと申しましたが、ご遺族の皆様は勿論、私共にとっても命ある限り戦後は終わりません。とは言え私共も八十歳を越え、体力、気力の衰えは如何とも致し難く、特操会としての頌徳祭は今回を以て終了させて頂き、今後は近畿特操会にお願いすることに致しました。」と祭文を奉上され、引続いて玉串奉奠は会長、全陸軍航空碑奉賛同人会山口副会長、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会深川副会長、関西白鴎遺族会鈴木事務局長のあとご遺族三六名が涙を押さえて玉串を奉奠、最後に特操各期一二八名は各期代表に併せて拝礼した。碑前祭終了後各期別に記念撮影を済ませ、場所を「ホテルりょうぜん」に移し総会を開催した。広川事務局長からご遺族のご紹介と会務報告があり、直会に入り山口副理事長が乾杯の音頭をとられ、今年は特別に三枝万祐さんの懐しのメロディーもあり会場の雰囲気は一段と盛り上った懇親会であった。

三十年余にわたった頌徳祭も今回で終ったかと思うと妙に寂しい気分になったが、幸せなことに神社に隣接する高台寺から清水寺に通ずる三年坂周辺は京都でも屈指の観光スポットであり、また神社には若い世代に人気がある坂本竜馬の墓もあり、人の絶えることがない。公園墓地の帰途神社構内で大きな特操之碑の副碑の前に佇む若い人達も結構多いと聞くが、彼等が一身をなげうって国に殉じた学徒兵の心情にふれ恒久平和への道の選択を誤ることのないよう願うものである。

川南護国神社例祭

田中　賢一

この記事は既に何回か掲載したので一部重復する個所はあるが、特攻の御祭神も祀られているので紹介する。

宮崎県児湯郡高鍋町にあるこの神社には、地元出身の戦死者六三四柱だけでなく、嘗てこの地に基地があった空挺部隊の戦死者一万余柱が合祀されており、毎年11月23日に町長が祭主となり祭典が町を挙げて行われている。

更に式の冒頭に国旗を掲揚するのであるが、これはこの地域を隊区にもつ都城の自衛隊が行い、県内二つの陸上自衛隊と航空自衛隊及び習志野の空挺団からも、代表が参列している。

さて私共戦友も以前は百人ぐらい集まったが、寄る年波今回は二十名程になってしまった。私は戦友を代表して一文を奏上するのが慣例のようになってしまったので、今回も次の一文を奏上した。

川南護国神社の御祭神に捧ぐる辞

戦熄みて五十八星霜　往時の戦友残り尠くなりて　孫児の代ともなりぬ　み国の為命捧げし英霊のことなど　世人の念頭より消えんとするも　我ら英霊と共に戦いし者共　亡き戦友のこと　夢寐忘るる能はず

この宮居に立たば　唐瀬の原に相携え武を練りしこと　昨日の如く思はれ　戦友の颯々たる英姿なお瞼にあり　共に抱きし挺進殉国の精神に違うことなく　君は直蒙進し国に殉ぜられぬ　如何なる星の定めか　我は生き長らえ　ここに老醜を晒す

我が思いみそひと文字に託す　うべない給うや

日向路の唐瀬の原に花咲きし
　わが友垣のこもるひもろぎ

富む春秋国に捧げし戦友に
　すまぬ思いの八十路かな

稗つきの節おもしろく歌いたる
　君にこたへむ柏手もって

地元御出身の御祭神に申し上ぐ　我ら縁あってこの地に若き日を過ごす　人情極めてこまやかなりき　英霊はこの郷にはぐくまれし御心もて　お国に命捧げられしならん　年経れど四季の巡り変わることなきが如く　郷の人の心昔ながらなれば　御心泰く神鎮まり給え

うぶすなのみ霊在ますかまほろばの
　昔ながらに木々色づきぬ

平成十五年十一月二十三日

挺進部隊戦友代表　田中　賢一

川南護国神社の例祭に参じ

社の森に　秋酣けて　澄み渡りたる大空に
高く掲げし日の丸を　仰げば聞こゆ天の声
朝日に映ゆる　日向灘　夕陽棚引く尾鈴山
ああ青雲に　花開き　草の香漂う　唐瀬原
高千穂部隊の精鋭は　疾き事風の如く去ぬ
烏兎匆々の　六十年　君は護国の神となり
瞼に浮ぶあの顔は　匂うが如き武者なるに
幽明境を異にして　杖を頼りにたどり来ぬ

〝庭の山椒の木　鳴る鈴掛けて〟
君が得意の稗搗節　消えゆることなく我が耳に
今宵の宴加わりて　君が好みしからいもの酒
まほろばの郷川南　輪たもたばまたまからん

若潮の塔最後の慰霊祭

若潮会　顧問　皆本　義博

海上挺進第三戦隊戦友会会長

晩秋十一月二十三日、秋晴れの小春日和の下、陸軍船舶特別幹部候補生の組織若潮会（第一乃至第四期）によって、香川県小豆島の土庄町で、最後の慰霊祭が行われた。

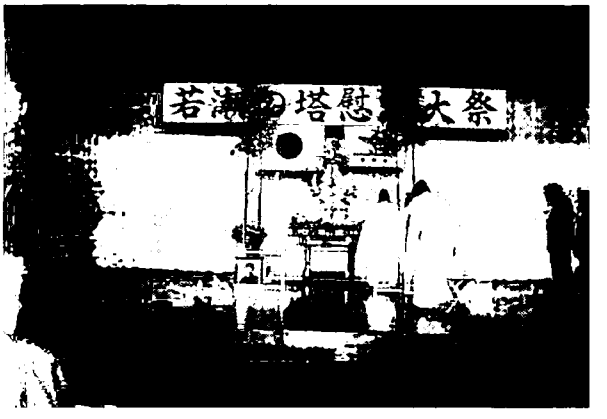
この大祭は、四年ごとに行われて来たが、今年をもって大祭の終りとすることから、全国各地から、特幹隊員・戦没者遺族・隊員家族三百五十名が参集し、厳粛で盛大な式典となった。

また、各期生は、この慰霊祭に合わせて、それぞれ同期生総会を、この前後に実施した。

慰霊祭は、土庄町の富丘八幡神社にある鎮魂碑「若潮の塔」前で行う予定であったが、参集者が多く、この境内に収容し切れず、又陸上自衛隊中部方面総監渡辺元旦陸将のご配慮で、善通寺の第二混成団の音楽隊が、森良司隊長以下三十名の来演があり、したがって先ず一〇〇名で塔前祭を行ない、総員参列の慰霊式典は、町立中央公民館ホールに祭壇を設け、町長以下町役員の方々多数の来臨のもと実施された。

慰霊塔は、昭和四十八年に建立され、戦死者千五百柱をまつる塔であるが、特幹生各位も高令であり、今回をもって最後とし、今後は富丘八幡神社、地元協力者でつくる若潮会奉賛会によってお守りいただくことになった。

また、特幹隊が置かれた東洋紡績渕崎工場の旧女子寮に、特幹生が自らの血で書いた「血書版」が大事に保存されており、この保管については、特幹隊代表者と地元とが協議の上決めることとなっている。



お知らせ

一、平成15年12月3日（火）開催の定例理事会で、土田八也氏（水交会常務理事　甲飛14）が、評議員に選任されました。

一、平成15年12月10日（火）開催の定例評議員会で、小松利光監事の辞任と後任として、伊集院雅英氏（税理士　陸士61）が選任されました。

特攻平和観音堂改修費
寄進者芳名録（敬略称）追加

平成十五年十月四日～十二月二十四日
寄進額累計四百二十七萬三千円
寄進者数一千七〇名

氏名	県
山岸　良輔	宮城
粂川　欽一	栃木
鈴木　伝六	群馬
加悦　義矩	千葉
阿久根　正	東京
岩田　太郎	〃
野中　一夫	〃
小瀬　利春	神奈川
山下　茂幸	〃
神波比良夫、栄子	滋賀
酒井　嘉代	大阪
松澤　孝春	〃
富永　信良	香川
金澤　時郎	高知
前田　宰	〃
新開　崇司	福岡

注　観音堂の改修は年明けに工事を始め、秋の年次法要には新しい回廊が完成する。

図書紹介

田中　賢一

ここに紹介する本は協会で委託販売として預かっているので、お申込みあれば現物と郵便振込み用紙をお送りします。代金は後払い。

陸軍特別攻撃隊富嶽隊と隊長西尾常三郎をしのぶ

この書物は西尾隊長（陸士50期）の同期生達が編集したもので、80頁ばかりの小冊子であるが、西尾隊長や隊員の精神はよく推察することができる。富嶽隊についてはこの会報54号に「富嶽隊と万朶隊」という標題で載せておいた。この冊子もその中から富嶽隊の部分を抜粋して、全般経過の説明に充当しているが、この冊子は隊員就中西尾隊長の内面的なところがよく描かれていて、感銘深い。

送料共一、〇〇〇円

特攻隊長伍井芳夫

臼田　智子

著者は第23振武隊長の次女で、この本のことは前号で紹介しておいた。亡き父を思う心を通じ、特攻隊長の精神を汲み取ることが出来る。207頁。

送料共　一、八〇〇円

特攻隊補給品の空輸

挺進飛行第二戦隊　畠山　卓次

編者註　挺進飛行第二戦隊は挺進集団内挺進飛行団の隷下部隊で、レイテ空挺作戦にあたっては、一個中隊を第一戦隊に増援した。この中隊は第一撃で全機未帰還となった。

この頃は宮崎県の唐瀬原にいたが、編制の通り人員器材は揃っていなかった。四月に北鮮の咸興に移り、第一戦隊に吸収され零編制となった。

艦船一四〇〇隻以上、航空機一五〇〇機の米軍は、三月一八日以来沖縄本島周辺を包囲し、先ず艦砲射撃を以て攻撃して来た。

徳之島の南西海岸に在ると言われる、我が軍の小型機特攻基地も、連日の砲撃で通信施設が破壊され、その消息も途絶えてしまった。

三月末からは、敵も沖縄本島上陸作戦に備えてか、艦砲射撃の度は益々激しく、飛行場も日中の使用は不可能となったが、飛行場端の洞窟内には、尚二〇機の特攻機が残っているらしい。そこで、部隊に通信機搬入の命令が下った。飛行場といっても勿論、特攻用に急設された小さなもので、命令を受けた戦隊長以下、我々も見たこともなければ、そこに飛行場が在ると言うことさえ知らなかった。

「多分、島の南西海岸にあるらしいが、日中は敵の砲撃で穴だらけだが、夜になると穴埋めをしてあるので、長さ六〇〇mあれば輸送機の発着位は、どうにか可能である。

但し、島の周囲は敵艦に取り囲まれているので、夜間照明は出来ないが、飛行場の四隅には穴を堀り、赤色灯を真上に向けて点灯してある。島を余り離れると。敵船よりの砲撃を受けるので。場周飛行は小回りにして速かに着陸し、着陸後はエンジンを停止せず、直ちに積載物を降ろし、成るべく早く島から離れること、但し長機は離陸後上空にて、全機の離陸を確認してから帰還すること。板付飛行場の離陸は十七時とし、三分間隔とする」等々の細かい注意が、戦隊長からあった。

編隊長塩田中尉機（長機操縦畠山少尉に機関係一名）以下、緒方少尉、後藤少尉、松井少尉、内藤少尉、塩崎少尉の特操の面々に、大出准尉外のベテランが副操縦に付いた四機は、敵の迎撃を避けて機の間隔をおき、十七時〇分板付飛行場を離陸一路沖縄に向った。

途中左手に見えた九州の島影を離れる頃より、次第に高度を下げ、敵艦艇よりの電探を避ける為、島に近づく頃は海上一〇m位にて飛行する。

予定時間の一九〇〇頃、高度五〇〇～一〇〇〇mに雲量八位の層積雲があり、行く手遥かの雲下に浮かぶ鼠色の島影が見えてきた。

薄暮とは言え、島の前方は海上遥か彼方まで案外に明るく、処々に小さな積乱雲が夕陽に輝いていた。もう少し前進すれば、右手に沖永良部島までも見えるかも知れない、間違いなく徳之島！と思った途端でした。「オッ、グラマン！」　の塩田中尉の声に、指差す右前方を見ると、二機のグラマン戦闘機が目前に迫って来た。

武装とて無い輸送機では退避するより致し方なし、慌てて左に旋回すると共に、急上昇して幸に近くにあった雲の中に飛び込んだ。

この頃には、敵の艦影なしと高度も三〇〇m位に上げて飛行していたのと、近くに断雲があったので助かった。

雲中に飛び込むと同時に、水平飛行で約一分ぐらいか、その間程永く感じたことは無かった。今にも雲中の我が機目掛けて、敵弾が掠め飛ぶのではないかと思い乍らの雲中飛行は余計に永く感じる。

それから更に左に四十五度変針し、僅かに上昇を続けること一分。更に右に四十五度変針する。機関係りが何時のまにか用意してあった錫箔を、変針する度に窓からばらまいていた。敵機は機上探知機を備えていると、考えてのことである。

ほんの三～四分ではあったが、操縦桿にしがみついている身には余りにも永かった気がする。待ち切れずに雲下に出て、島の方向を見た時だった。

「如何ん！未だ駄目だ！」先程のグラマンが二番機を追っているのが見えた。

慌てて再び雲の中へ。もう辺りは薄暗くなってきていた。

今度は雲中を島とは反対方何に、二～三分飛行して再び雲下に出て見た。

先程のグラマンも後続機も、何処へ行ったか見当らないが、そろそろと島の方向に近付いて行った、雲下の故か海面はすっかり暗くなりかけていた。

その時だった！、今迄我々を追っていたグラマンの二機が、反転し薄暗い海上に鈍い銀色の翼を見せて遠ざかって行くのが見えた。

左手に黒く見える島影に近付き乍ら、グラマンの飛び行く方向に眼をやると、手前の下層に浮かぶ、断雲の向こうは、漠然とした水平線の彼方まで、残照と言うか意外に明るかった。

中層雲の切れ間から洩れ差す、黄金

色の光は海面まで届いて薄いベールとなり。更に透かし見る遠方は、上層雲のみか、夕焼けの空は海面の藍色に反射して、空全体が緑を混えた黄金色に輝いていた。

その中に、海面から盛り上がった大小幾つかの積乱雲は、遠く近く幾つかの峰を作り、既に崩れだした雲の峰は、横にたなびいて灰色の層をなしているもの、盛り上がる峰の部分に、未だ白銀色の鈍い光を放っているものもあり。南の海に生成する積乱雲の、標本を見る様であった。総て瞬間に見た感じであり、下手な描写をすれば永くなるが。

そんな背景をバックにして、既に暗く見える島の上に掛かった層雲の、向こうの中層雲の下を、今しも沖縄本島周辺の敵艦船に向かって飛び征く、七～八機の影絵の様な友軍の特攻機が見えた。

今迄吾々を追っていたグラマンは、母艦からの指令か？、此方を諦めてか？、反転してこの特攻機を追い掛けだしたのだった。

あの轟音と興奮の坩堝（るつぼ）と化した、特攻基地知覧から。必勝の鉢巻き姿で「一足お先に」にと戦友に別れを告げて機上の人となり。一路沖縄の敵艦目指して、飛び征く特攻機ではあったが、九八式直協偵と見たその姿は、脚を出し、一見して猫背に見えた。

誠に申し訳無い話しだが、アヒルの行列の様に哀れにも見えた。

哀れなこの機影を追い行く、憎きグラマン奴。護衛の戦闘機も無く、性能の違うグラマンに追われては、・・・「どうか追い付かれねば、良いが」と、そのグラマンに今迄追い廻されていた我が身を忘れ、只々、無事に任務達成してくれと、祈るのみだった。

その様な特攻機の影も、海上の景色も、グラマンの機影も、日没と共に瞬時にして、拭い去られる様に消えて行った。

そろそろ敵は、夜間戦闘機P－38との交替時間では？と、考えると一刻も速く島に到達しなければならない。

頃は良し、と島の南西端の飛行場と思われる上空に、高度一〇〇mで進入した。

既に時間となった中では、陸地も海面も何も見え無い。赤色燈が四ヶ所、飛行場の位置を示しているのみだったが、北々西に伸びた長方形で、着陸方向を確認した。

上空で旋回し、赤色燈に沿って滑走路と思われる方角に飛行すること一分、よし三一〇度と確認後、左に九〇度で三〇秒、更に九〇度変針して一三〇度で二分飛行し、第三旋回は一二〇度廻り込むと共に脚下げを、この時点での高度は五〇m位だったか。

これらの操作も総て真暗闇の中でのこと、計器盤のみ青白く光り、窓を開けて海面に眼をこちすと、波頭が僅かな光を帯びていた。

飛行場に対して、左斜めに進入して来た筈だからと、機首を下げ乍らの左六〇度の第四旋回、羅針盤は三一〇度を示した。良し！、これで確かに滑走路に向かっている筈だ。

フラップ二〇度下げ、エンジンを絞り、高度を海面すれすれ位い迄下げた。

見えるぞ赤色燈が！、方向良し！、フラップ全開、前照燈点灯の瞬間、波打際の白い微かな光を通り過ぎた。左右の赤色燈が、またちらっと見えた。飛行場に入ったを確能すると同時に、エンジン全閉、地上五〇cm位いで、機首を上げ、落し気味で接地した。同時に尾部が上がる位いにブレーキをかける。先の見えない短かい滑走路である、突破したら大変なことになるからである。

少々の余裕を残して滑走路の端近く停止して、やれやれと一息ついた。

闇の中に、懐中電灯を持った兵隊が走り出てきて、誘導路に入った。

後続機も次づぎに着陸してきて全機無事を確認、その間にエンジンを掛けたまま積載物を降ろし、再び闇の中を離陸した。

上空で旋回し全機の離陸を確認後、一刻も早くと島を離れ帰還の途に着いた。

高度二五〇〇m、月は見えないが、明るい積雲層の上を飛行すること一時間半、警戒警報発令中の、唐瀬原飛行場に帰還した。

礪田戦隊長は、飛行場のピストに出て待って居られ。全機の無事帰還とその労をねぎらって、航空ブドウ酒で乾杯して頂いた。

二日後今度は、特攻機に使用する爆弾搬入の、緊急命令が出された。

これは大変な事になった。此の前の様に全機、無事帰還出来るとは思われ無い。

戦隊長も、知覧基地の参謀直接伝達の命令だがなんとか方法を考えよう、と言うことになり、早速知覧に行かれ、対艦用六〇kg爆弾何発かを受領、これに物量箱投下用の落下傘を着け、唐瀬原飛行場の端にて、高度二〇〇m位からの投下実験を行った。勿論信管は別梱包であるが、味方の飛行場に爆弾投下とは、始めてのことで、これには成

功したが、六〇〇m位の間に、何回投下出来るかである、場合に拠っては二回に分けての、投下復行となり兼ね無い。混乱を予想して今回は物量投下の九七式重爆三機で行くことになった。

今度は、グラマンとP38の、交替時刻を見計らって行くことにしたが、P38の機上探知機に引っ掛かり、暗闇の中から射ち込まれては大変と、深夜の十二時頃に到達することに決定した。

前回と同様、板付基地発進となり。爆弾の梱包、落下傘の装着は、聯隊から整備の兵隊が出向いて、してくれたように記憶する。

板付飛行場を二二〇〇時発進。暗闇の海上一〇mを、横窓を開け、只一心不乱に。海面に微かに光る波頭だけを、見つめての操縦である。時折は、青白く光る計器盤に視線を移すが、ちらっと見るのは羅針盤だけで、高度計は零を指し、昇降計は一文字に青白く光っているのみである。少しでも気を緩め、操縦桿を握る手を緩めた瞬間に、波に飲み込まれ兼ねない。

然し実際には、水平線も見えない闇の海上では、波頭の光を見ての超低空飛行の方が。息の詰まる様な緊張の連続であるが、飛行し易いのではとも考える。

但し、此の超々低空飛行は、敵艦艇よりの電波探知を避けての、止むを得ずの低空飛行であり、唐瀬原飛行場にての暗夜の訓練飛行には、豊後水道に点々と浮かぶ、いか釣り舟の灯でも水平線を判断する材料となり、大いに助かったものである。

そろそろ徳之島に近ずいたと思われる頃だった。塩田中尉から「オオッ！」と言う声と共に膝を叩かれ、ハッと前方を見ると、真黒な小山の様な物が眼前に迫っていた。瞬間操縦桿を引上げ、擦れすれに飛び越した。敵艦だ！。敵もこちらの近ずくのをキャッチ出来なかったのか？、爆音と共に頭上を飛び越され、始めて機関砲が火ぶたをきったらしい、チラッと振り返っただけだったが、機関係の曹長が「凄い！、火柱が！」と叫ぶ。

敵も慌てて高射機関砲で追随してきたか、大きな火柱が追ってくる様だったと言う。

早々に島の上空に到達、高度二〇〇mで、長方形の成るべく海岸線寄りに、搭載物を連続投下で放り出した。物量投下も落下傘部隊のお手のものであり、成否を確かめる術も無かったが、爆発の火を見なかったので、多分成功したものと確信する。後続の二機も同様と考えられる。

投下後はそのまま島を離れて、北々東に上昇し、雲上に出て唐瀬原に向け帰還の途に着いた。月は無かったが、雲上はさすがに明るかった。

「敵艦の真上に出たとはなあ、良かった、爆弾は信管を外してあるので、特攻機にもなれんしなあ」、と冗談交じりの塩田中尉の声も、緊張の連続から解放された後の一安心からか、明るかった。

高度三〇〇〇m、むくむくと盛り上がり鈍く銀鼠色に光る雲上を、飛行すること一時間半。そろそろ九州にと、処々にある雲の切れ間から下を覗くも、雲下は暗闇で何も見えない。地点標定も出来ない中に密雲となってしまった。少々機首を右に振り、豊後水道の南端に出ることにした。

やがて雲の切れ間を見付け、縫うようにして高度をさげた、相い変わらずの暗闇だが、高度一〇〇〇mでどうやら海上に出た様だ。

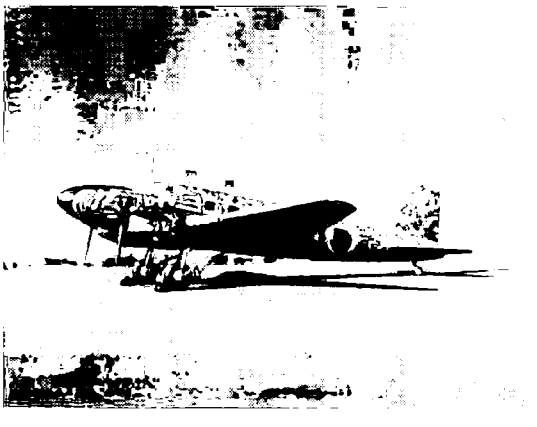
いか釣り船も見えないので、果たして何処か分からない。

この時、九州全土、空襲警報発令中だったらしい、吾々の機も敵機来襲と間違えられたか？、時計は午前二時を指している、この真夜中に敵の艦載機の来襲は無い筈だ。

次第に高度を下げで行く中に、僅かに見る波打ち際で海岸線を見付け、やれやれと思ったが、陸地を覗き見るも遠くまで闇である、が、此処まで来れば唐瀬原飛行場はすぐ其処に在る。

場周飛行中に着陸誘導灯が点灯された。

全機無事帰還したが、敵艦の真上に出たのは吾々の機だけだったらしく、お陰で機関砲の火柱は見られたが、冷汗ものでした。



今期の戦史 ④

このシリーズの番号について　①が欠ているが海軍落下傘部隊のマナド作戦のことを54号に①として載せようとし、紙面の都合で取止めた為で55号からのものの番号を一つづつ繰上げます。

昭和十六年十二月八日の作戦

申すまでもなく大東亜戦争発起の日である。この日我が国は、世界戦史に類をみない広大な地域で整然と作戦行動を開始した。その地域は経度で見ると世界の三分の一にもあたる。

ところでこの日、広大な地域の各戦場でどのような作戦が行われたか、眺めてみよう。

真珠湾攻撃

十一月二十二日までに南千島の択捉島単冠湾に集合した一航艦基幹の機動部隊は一、二、五航空戦隊（空母六）基幹の空襲部隊、三戦隊（高速戦艦二）、八戦隊（重巡二）基幹の支援部隊第一水雷戦隊（以下水戦）基幹（軽巡一、駆九）の警戒隊、二潜隊（潜三）の哨戒隊及び高速油槽船七の補給部隊であった。

開戦劈頭ハワイ方面敵艦隊を奇襲する命令は、機密保持上単冠湾で二十三日下達され、二十五日午後哨戒隊、翌二十六日朝警戒隊、本隊の順に出港し一路壮途に就いた。

十二月二日遂に開戦の大命が下り、開戦時期も下令された。

聯合艦隊司令長官は「新高山登れ一二〇八」と開戦命令と開戦日を麾下に伝えた。

この頃、米艦隊の偵察、監視、攻撃、機動部隊の前路掃航、甲標的による真珠湾港内敵艦隊攻撃のための潜水艦部隊である先遣部隊も、それぞれハワイへ迫っていた。

七日、機動部隊は、大本営から敵空母は二隻とも出港不在であるが、戦艦は全て真珠湾内に在泊中との最新のハワイ情報を入手し、偵察した潜水艦からは、ラハイナ泊地に艦隊不在との報を得て、南雲一航艦長官は攻撃を真珠湾に集中することを決意した。

八日発艦地点に達した機動部隊は、〇一〇〇（以下何れも日本時間）直前偵察機を、三〇分後真珠湾北二三〇カイリで第一次攻撃隊を更に南下して第二次攻撃隊を発進、以後一九〇カイリに達して反転北上した。第一次攻撃隊は、〇三一九「ト連送（全軍突撃せよ）」、〇三二二「トラトラ（われ奇襲に成功せり）」を発し、以後偉大な戦果を収め第二次攻撃隊は更に戦果を拡充した。米側の被害は、戦艦四、敷設艦一沈没、戦艦四、軽巡三、駆逐艦三、水上機母艦（水母）、工作艦各一損傷、陸海軍機二三一被破壊、戦死、行方不明二四〇二であった。

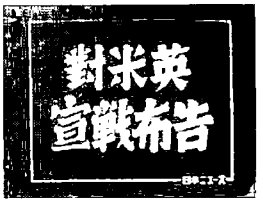
これに対し、日本側の被害は、飛行機一九、搭乗員五五であった。

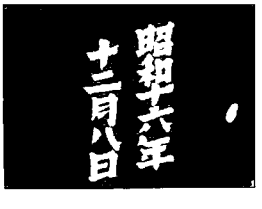
機動部隊は、〇九二二、攻撃隊の収容を終え、指揮官は作戦目的を達成したと判断し、敵空母の所在不明、敵基地航空機の反撃予期等の状況から、直ちに避退を決意し、高速離脱を図った。当時米空母エンタープライズは、海兵隊戦闘機をウェーキ島に輸送後、オアフ西二〇〇カイリを帰投中であり、レキシントンは海兵隊戦闘機の輸送のため、ミッドウェー向け航行中であった。なお、オアフ島北端のオパナのレーダーは、我が攻撃隊の近接も離脱も、ともに探知していたが、その報告は太平洋艦隊司令部には届いていなかった。

七日夜、母艦から発進した特別攻撃隊の特殊潜航艇五隻は、湾内外での被攻撃撃沈、座礁等により戦果を挙げるには至らず、港外待機の母艦に収容された艇もなかった。

真珠湾口の直接監視等に当たっていた潜水艦は、湾外の敵の対潜警戒が厳重をきわめたため、配備位置を湾口から離隔させる要があり、監視効果も期待できなくなった。

米主力艦隊と共に空母を撃破し、敵空母の我が本土急襲を制することも企図していた山本長官にとっては、敵の空母の討ち漏らしは痛恨事であり、更に積極的な作戦により、早期に我が長期不敗態勢を確立することが緊要と認められた。





●大本営陸海軍部発表
十二月八日対米英宣戦布告を発表

マレー半島上陸作戦

この日上陸作戦を行ったのは、第二十五軍の第五師団主力と佗美支隊（第十八師団の歩兵第二十三旅団長佗美少将の指揮する歩兵第五十六聯隊基幹の部隊）である。

輸送船一七隻より成る輸送船団は、十二月四日海南島三亜港を出港し、海軍の第三水雷戦隊の護衛のもとに南下した。懸念していた敵空海の攻撃もなく七日夜半それぞれ予定の泊地に到着した。

佗美支隊のコタバル上陸戦闘

淡路山丸、綾戸丸、佐倉丸の三隻より成る船団は、第一護衛隊主力の護衛の下に、七日二三三〇頃泊地に進入し第一回上陸舟艇群は八日〇一三〇陸岸に向かい発進し、激しい敵火を冒し上陸を敢行した。時に二時であり、真珠湾攻撃より一時間余り早かった。

〇三三〇頃から敵機三、四機が次々と来襲し、対空火器により七機を撃墜したが、淡路山丸は火災を起しやがて沈没した。佗美支隊長は第二回上陸をもって一時揚陸を中止し、護衛隊指揮官は被弾した綾戸丸と佐倉丸を一時退避させ、翌日揚陸するに決した。

上陸した部隊は混乱した部隊を整理し、兵力半数程だったが四キロ程先にある飛行場に向かい前進した。二一〇〇頃飛行場ま近に迫ったところ、飛行場に大火災が発生した。これは敵が退却する時集積燃料に放火したのだったかくして佗美支隊の十二月八日の戦闘は終わった。

第五師団の上陸戦闘

シンゴラ、パタニーの上陸地点に向った第五師団は、航行間敵の妨害を受けることなく七日正子前後泊地に進入した。上陸地点は何れも泰の領土である。泛水移乗の作業は月明に助けられたが、波が高く困難を極めた。師団主力は〇四一〇シンゴラに、安藤支隊（歩兵第四十二聯隊基幹）は〇四三〇パタニーに、何らの抵抗もなく上陸した。

上陸した部隊はそれぞれ事前に示された計画通り英領マレーに向かい突進したが、泰国との協定が結ばれたのが同日正午だったため、現地の泰国軍と紛争を惹起した個所があったが、間もなく解決した。

第三飛行集団の船団援護

集団は第十二飛行団に固有の部隊のほか更に所要の部隊を配属して担当させた。船団援護に任じた戦闘機の部隊と基地は次の通りで、上空援護は七日日出より日没までとした。

1F	42機	コンポントラッシュ	
11F	39機	クーカン	
64F	35機	ソンド	
77F	12機	ソンド	

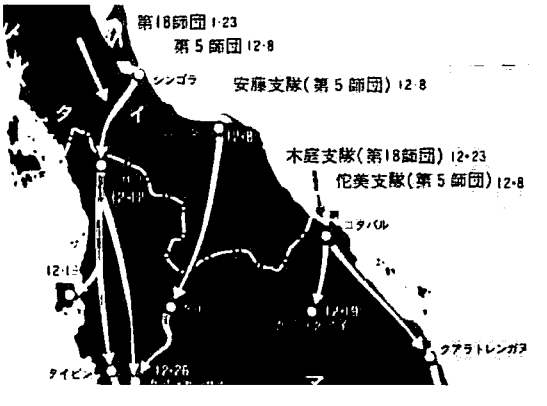
飛行第一戦隊の窪谷敏郎中尉は97戦を駆けって パンジャン島北西四〇キロ高度一〇〇〇米付近で、敵哨戒飛行艇と遭遇、敵が射撃して来たので直ちに応戦、これを撃墜した。対英の緒戦というべきである。それ以外に敵影はなかったが、夕刻から天候悪化し最後の時間帯を担当した六十四戦隊では三機が未帰還となった。また戦闘機誘導に任じた重爆一機が海没した。

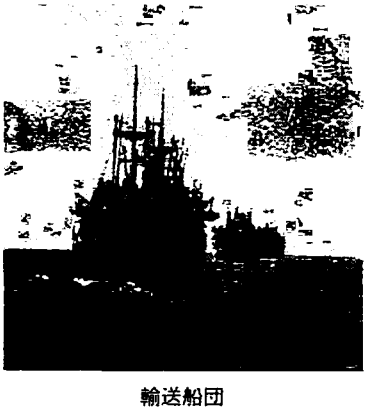
海軍のマレー作戦

我が南方部隊の兵力は、空母一、水母二、戦艦二、重巡一二、軽巡八、駆五二、潜一四、基地航空三戦隊（五〇六機）基幹であった。このうち戦艦は高速戦艦金剛、榛名（各三六センチ砲八門）であった。十二月二日英国は、プリンス・オブ・ウエールズ（三五、六センチ砲一〇門）とレパレス（三八、一センチ砲六門）のシンガポール増援を公表した。

シンガポールにある英艦隊の出撃を警戒しつつ、マレー上陸船団の護衛は重巡四、軽巡一、練習巡一、駆一三をもって行った。

英艦隊が出撃し、我が海軍基地航空の中攻八五機がこれを撃滅したのは十日のことである。




輸送船団

比島に対する航空撃滅戦

ルソン島攻略は正攻法、即ち制空権を獲得してから地上進攻するという方法が取られた。そこで開戦と同時に台湾南部に展開している陸海軍航空部隊がルソン島の各飛行場に進攻することになっていた。台湾の陸軍航空は第五飛行集団で、隷下の第四飛行団が十二月八日の進攻を担当した。

この日〇六二〇から〇七三〇の間、佳冬及び潮州飛行場を離陸した飛行第八戦隊（双軽二五機）、飛行第十四戦隊（重爆一八機）は前後して北部ルソンに進入した。予期していた敵戦闘機の要撃もなく、〇九三〇ころ第八戦隊はツゲガラオ飛行場を、第十四戦隊はバギオ兵営及び通信所等を爆撃し、一二〇〇前後に全機無事帰還した。

一方海軍航空部隊は第十一航空艦隊であるが、敵戦闘機が多数いると判断されるイパ及びクラーク飛行場に第一撃を集中することにした。

〇三二〇真珠湾攻撃の情報が入り、もはや奇襲は不可能と判断し、中攻二七機をもってイパの敵戦闘機を陽動誘致したのち、約二時間後主力を発進させ、敵機の補給着陸の機に乗じ、全力をもってイパ、クラークの両飛行場を攻撃するよう計画した。

ところが〇六〇〇ころから霧深くたちこめ離陸出来なくなったので、計画を変更し全攻撃力をイパ、クラークに集中することにした。一〇三〇～一一〇〇の間霧漸く晴れ、高尾、台南両飛行場を離陸することが出来た。そして一三三〇以降攻撃したところ、陸軍機の攻撃後の警戒の手薄、混乱の機に乗じ攻撃をかけることになった。

攻撃の成果は極めて大きく撃墜二五地上撃破大中型機四五、小型機三三のほか飛行場施設も破壊した。

これとは別に、八日早朝ダバオ東方約四五〇浬の洋上に進出した空母龍驤は、艦上攻撃機一五、艦上戦闘機一二機をもってダバオを攻撃した。

バスコ飛行場の占領と小型機の躍進

北部ルソンに上陸するのは十二月十日であるが、陸軍の97戦は台湾の基地からでは上陸地の支援は困難なのでバシー海峡の真ん中にあるバタン島上陸作戦が八日に行われた。この島には小型機が使えるバスコ飛行場があり米軍の監視隊がいた。

この飛行場の運用に任ずる第二十四飛行場大隊の一部は、海軍陸戦隊と共に七日夜台湾の港を出て、八日一二一〇バタン島に上陸し、飛行場の整備及び勤務に就いた。

香港攻略

この作戦は第二十三軍が担当した。軍の計画は先ず九龍半島の敵堅陣に対し、北島砲兵部隊をもって徹底的に叩いた後、第三十八師団をもって攻略するという正攻法だった。北島部隊は重砲兵第一聯隊（24榴八門）、独立重砲兵第二、第三大隊（15加計一六門）独立臼砲第二大隊、砲兵情報第五聯隊基幹という大兵力だった。

開戦前三十八師団の部隊は密かに英支国境近くに展開していた。十二月八日マレー上陸作戦開始の電報を傍受するや、支那派遣軍総司令官は二十三軍司令官に進攻を命じた。待機していた部隊は四時国境を突破し、抵抗を受けることなく、敵防禦線前に進出した。

翌九日のことになるが、歩兵第二百二十八聯隊の中隊長若林中尉が、独断敵陣地の要衝を奪取したことにより、師団は十日攻撃を開始し、攻撃準備射撃を一切行うことなく、十二日敵本防禦陣地突破に成功した。

我が在支航空は南方転用のため微弱となっていたが、香港攻略の為第二十三軍飛行隊が編成されていた。その兵力は司偵一編隊、直協一隊、戦闘一中、軽爆三中、計約四五機だった。

開戦時天河飛行場に在った飛行隊の第四十五戦隊（軽爆）は〇七二〇離陸開始、第二、第三中隊は啓徳飛行場を第一中隊は繋留してある艦艇を爆撃した。また独立飛行第十中隊（戦闘）は啓徳飛行場にある敵機一二機を銃撃炎上させた。

更に午後も出動し敵航空を完全に撃滅した。

その外十二月八日に行われた作戦

グアム島には、十二月十日に陸軍の南海支隊と海軍の第五根拠地隊が上陸するのであるが、八日と九日には海軍の第十八航空隊が、水偵をもって爆撃した。

ウエーキ島には、海軍の舞鶴特別陸戦隊と第六根拠隊が上陸するのであるが、八日から千歳空は熾烈な対空砲火を冒して飛行場を攻撃した。なお上陸作戦は十一日に行ったが、天候不良と敵火の為失敗し、充分な準備を整え二十三日に復興した。

支那各地にある敵国の租界や権益は十二月八日一斉に兵力をもって接収した。また上海に停泊していた米英の砲艦には、軍使を派遣して降伏を促した。米艦長はこれに応じたが、英艦長は拒否したのでこれを撃沈した。

ある偶然のきっかけで思うこと

評議員　穴山　正司

春の一夜に、ある人との交流で会え程よく飲んでからの事、彼の行きつけのスナックに足を運びカラオケに興じるままの一時に、トイレにと思い立っていくと生憎前人者が居て、待つ間にカウンターに一時的に座る、前任者が女性なのか中々出て来ない。座って待つカウンターの隣の方で、一見も無い見ず知らずの方でしたが、アルコールも入って居た関係からか、「今日は何かありましたかね」と問われた。

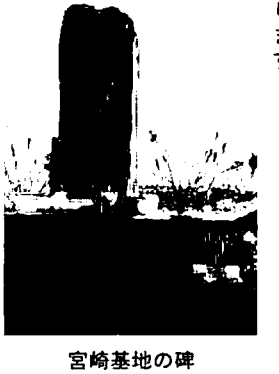
私は其の問いにすかさず「今日は毎年の事ですが、予科練行事の一環で、靖国神社での昇殿参拝の帰りです」と答えた処、彼は、「私の兄も予科練出身で沖縄戦の時に、特攻隊で亡くなりました。詳細は戦後も六十年近くになり、私も上京した関係で不明ですが、予科練出身である事と沖縄戦で亡くなった事だけは覚えています。」との話でした。取り敢えずトイレで用を済ませてからお聞き致しますからと言え、スナックのママからメモを頂き、其の英霊の氏名をメモに書いて下さいとお願いをして用足しを済ませた。

メモには唯英霊の名前のみが書き記されてあった。翌早朝に特攻戦没者名簿を調べて見ますと、この英霊の方は予科練甲十一期出身者で、昭和二十年四月十一日に宮崎基地を、神風特別攻撃隊第五銀河隊の一員で、七六二空攻撃五〇一部隊の三番機として、喜界島南方洋上の敵機動部隊攻撃に、一五三二に爆装五十番を抱えて離陸されてる事が、私の手元の資料にありました。

この日は此処宮崎基地からは、海兵七十期出身の山本大尉を隊長として、菊水一号作戦（四月六日～十一日）の一環として銀河五機十五名の方々が敵機動部隊攻撃に参加されて、沖縄本島作戦掩護に敵艦攻撃に向かった。この他にもこの作戦には、延べ二百機余と三百余名の特攻兵の英霊が、南西諸島方面海域及び沖縄周辺海域に、宮崎基地始めとして串良基地、第一国分、第二国分、鹿屋基地等から海軍が、そして又、陸軍は知覧基地、万世、都城等の各基地から飛翔して、皇国の防衛と親兄弟の安泰を願い、我が身を賭して決然として戦闘に先んじ、沖縄防衛は勿論の事、我が皇土を踏みにじる敵軍と、其の補給船や掩護艦船撃破に率先志願し、前述の神風特攻銀河隊の一員として散華された訳です。この作戦には数々の資料を見ますと、当時の昭和二十年二月頃に大本営は、全ての機材とあらゆる力を結集して、この国難打破を行うべく、海軍と陸軍が一体となって作戦を練り、内地は基より満州や朝鮮及び南方方面に存在する、飛べる飛行機と搭乗員を集めて、特攻作戦を四月始めにすべく大本営が決定して、其の第一陣を四日に的を絞って作戦が始まった事は、戦後の記録で衆知の事と思います。そして特攻のみでも前述の様に、二百機余の飛行機と三百余名の方が、この菊水一号作戦に展開されました。

この他にも特攻以外の作戦に従事された、数々の英霊は枚挙に暇ないが、特攻攻撃の標的索敵や、これら上空掩護と制空等に又、哨戒任務に関って飛び立ち、特攻機が目的達成の為に現地に飛翔しながら、敵軍の電探に補足されて敵機の邀撃を受けて空戦の結果、目的を果たさずに撃墜された等々、数多い英霊が南冥の空に海にと散華された事は衆知の事です。

私達は今漫然として戦後の文化を謳歌して、ともすれば半世紀も過ぎた今日を喉元過ぎた過去とし、これら英霊の顕彰さえも怠り勝ちの昨今、後世に伝えるべき義務さえも放棄しつつある今日、英霊が培ってくれた国防の尊さを是非共思い起こして、一人でも多くの方々に慰霊の誠を捧げて末代迄も戦争の苛酷さと共に今日の平和はこれら英霊のお蔭である事を伝える義務と、顕彰の責任をもちつつ永代迄も供養の心を忘れずに、この事業をまっとうしあってこそが、永遠の平和の扉が開ける日本人であって欲しいものと思います。遅きに失することは無い、尚一層の慰霊顕彰に協力を頂ければと思っております。



宮崎基地の碑

碑の傍にある歌碑

宇垣纏の戰藻録抜③

前号と前々号にこの標題の記事を載せた。どちらも特攻関係のものであったが、今回は特攻と直接関係はない。この提督について我々が関心深いのは聯合艦隊参謀長時代、「い」号作戦参加部隊視察の為山本司令長官に随行して、中攻二機に分乗しラバウルからブインに向かう途中撃墜され、長官は戦死、参謀長は重傷を負ったが生命をとりとめたということである。その時のことをもう少し詳しくのべれば、

昭和十八年四月十八日、山本司令長官は海軍第一線部隊の状況視察のほかガ島以来苦労を重ねている陸軍の第十七軍司令官を慰問するため、ブインに向かった。

中攻二機に長官と参謀長が分乗し、零戦六機が護衛した。離陸は六時少し過ぎていた。編隊は順調な飛行を続け七時三十分ブーゲンビル島南端に達し高度を七〇〇～八〇〇米に下げた。バラレ飛行場着陸は十五分後と機長から通報された。

このとき上空の我が戦闘機は、敵戦闘機の一群二四機が近迫して来るのを発見、直ちに戦闘を開始した。

中攻二機はジャングルすれすれに高度を下げ、搭乗員は戦闘配置につき砲門を開いた。この間敵機は中攻に迫り射弾を浴びせた。中攻は急速の大旋回により離脱しようとしたが間に合はない。長官機は黒煙を吐きつつジャングルに突っこんだ。参謀長機は海中に突入した。彼我の戦闘機が入り乱れ空中戦を行っている間の出来事である。

かくして山本長官以下二〇名が戦死し助かったのは参謀長以下三名だけであった。（公刊戦史による）

以下この件についての「戦藻録」の該当部分を転記する。

四月十八日　火曜日　晴　一周年記念

（註、一年後の昭和十九年四月十八日、第一戦隊司令官たりしとき、一年前を追憶して当時の情況を記したるものを特に茲に記載す）

（山本長官等遭難一周年思出の記）

我が命日にして同時に誕生日たる記念の日は一周して戦地艦上に訪れ来れり。起床後何時も乍らの御眞影に禮拝して上甲板に出で、旭日を右斜に見て山本元帥及六名の同時戰歿幕僚の英靈に敬弔の意を表し復讐を誓ふ。（名略）

彼の日以來半歳の記録は皆人の手を借りたるものにして、殊に入院までは司令部附蝦名賢造少尉に口述して其骨組を略記せしめたるに止まり、脂肉は之により後日手記するの考なりしなり然るに未だその擧に出で居らす一周年に當り、記憶を辿りて茲に外装を施し置かんとす。

前記

一、聯合艦隊司令部のラボール進出及ショートランド視察に至る經緯は、負傷歸艦後自ら口述筆記せしめ、軍令部次長及海軍次官に提出せし處なれば之を省略す。（軍機）

二、ガダルカナル方面續いてニューギニア東部に對する第三艦隊の海上航空部隊を合したる航空作戰は、約二週日に亘り多大の戰果を收めて終了せり。第十八軍司令官のニューギニア戰線巡視報告も後一ケ大隊の派遣を得ば維持可能なりとの事にて、兩々相挨ち、長官以下の氣分は安心はならずと雖も先づ先づと云ふ處にて小康的狀態に在り。將來の重要地點、前哨たるべき地點を視察し、士氣の鼓舞、第十七軍司令部に對する挨拶等をなし心にかかる雲を拂ひて十九日トラックに歸還せんとする心組なり。

三、警戒に關しては參謀長として相當踏むべき道程を辿りし後なれば、現地側の處置にも委し今更不安の念なし。

四、トラック出發に當りては戰斗司令所をラボールに移すなれば、直接必要ならざる幕僚等は可成同伴せざる主義を採りたり。食卓に於て三長（艦隊機關長、艦隊軍醫長、艦隊主計長）は先方の宿舍も狹隘なれば、又時機を見て出張する樣慰撫的に諭示しおきたり。然るに餘輩のデング熱に侵されたる當時、（十二四日頃か）軍醫長主計長來着せりと副官より意外の報告あり。來りしものは如何とも爲し難く別に干渉せずして置きたり。機關長は風氣味もありたる樣なるが餘の言を遵奉して、作戰上必要あらざる限り行かずとて來らず。

ショートランド行に對しても中攻二機に必要なる幕僚のみとする事とし、副官の屢々聴き質せるが、同方面行士官二名の同乘の可否を求めた外明瞭を缺くるあり。福崎副官は蓋しデング熱に罹りしも押して執務を繼續し氣分ハッキリせざる狀況に在り。為めに長官も自動車内にて他に參謀行くことなれば、惡い樣なら同行せざる方よしとまで云はれたり。

五、前日の自動車内にて白の開襟シャツを着用し行くやの問題あり。大勢は既に之に落着ありしが如きも、餘輩は飛行機の往復なれば大して暑くもなかるべく、聯合艦隊司令部員多數が規定

の第三種軍装以外を勝手に着して前線将士にまみゆるは面白からずと云ひ、宿舎歸着後副官より規定のカーキ襦袢着用の事に電話せり。尚又長官が第三種軍装を着用せらろが如き事今後其の機會あるや否や豫言し難きを以て明朝出來れば撮影し置くを可とすと副官に云ひ置きたるも隊に其の事無くして終れり。從って長官の撮影はラポール着翌日、第八艦隊司令部を其の廳舎に巡視せし時、三川長官等と共にせるものを最後とし、其の他は飛行機出發を見送られたる當時從軍寫眞班の撮影のみなり。

（活動寫眞を含む）（三川長官は其の直後轉出し歸國あり、餘を病院に見舞の際同寫眞の入手方依頼しおきたるも未だ送附を得ず）

六、今回の進出に先ち餘は前線視察を決心しありたれば、率先トラックに於て第三種軍装の借用を取計はしめ、尚編上靴と革脚絆を携行したり。然るに長官外同行者何れも黒色半長靴を借用する事となり、相當に考へたるが一同と同様たらしむるが可なりとし出發の朝餘も之を着用せり。離脱隨意にて割合に履き心地よし。之も生還の一助となれる事後よりぞ知る。

本記

一、六時出發なれば常よりも早く起床、空は晴れ渡りて早鳥の眼覺めて樹間に囀る聲もいと爽なり。〇五三〇頃食事をとり旅装を調ふ。第三種軍装嚴しく其の日歸なればポケットに収むる携行品（日記帳、眼鏡、煙草、手巾）のみなり。

二、〇五五〇宿舎玄關を出づ。長官の第三種軍装姿始めて見る。相當に似合ふも見慣れざる為か平素より異る。我に至りては尚更然らんも自分はよき積りなり。〇六東飛行場に達す。其の時指揮所の方向より同行の兩航空參謀連出で來る。中に白服二名あり。オヤと思ひしに軍醫長と主計長にして長官も變に思はれたるが今更如何とも為し難し。自動車を下り直に分れて中攻二機に分乘す。此の間餘裕なく長官の後より二號機の方に進みたるを以て別に言葉も交さずして止みたり。

一號機　長官、副官（福崎）、軍醫長（高田）、樋端參謀

二號機　參謀長、主計長（北村）、今中、室井參謀、氣象長（海野）

三、搭乘すると通信參謀、氣象長は機中に於て挨拶せり。餘は指揮官席に進みて腰掛け、帶劍バンドは其儘長劍のみを脱して、室井參謀に渡す。同參謀邪魔にならぬ後方へ立てかけたり。吾人の搭乘するや、兩機は直に發動、滑走路の端に至り次で一番機、二番機の順序に離陸、灣口の火山を眼下に見て編隊針路を南々東とす。天氣晴朗、視界良好の上上飛行日和なり。左右後上方に戰斗機三機宛警戒掩護するもの時々眼に入る。我高度は千五百程度と記憶するなり。

四、二番機は一番機の左斜後編隊見事にして翼端相燭るるなきやを時々危む位にして、一番機の指揮官席に在る長官の横姿も、中を移動する人の姿もありありと認めらる。航空用圖につき地物の説明を聴き乍ら氣持よき飛行を味ふ。

五、ボーゲンピル島の西側にかかるに及び高度を七、八百に下げジャングルの平地上を一直線に航過する時、機長紙片を手渡し來る。「〇七四五バラレ着の豫定」腕時計を見るに正に〇七三〇にしてあと十五分と覺えたり。此の時、機は不意に一番機に倣ひ急降下を開始し、五〇米の高度に降れり。何事？一同の心に感じたる處、通路に在りし機長（飛行兵曹長？）に「如何したのか」と尋ねたるに「間違ひでせう」と答えたり。斯く云ふ事が大なる間違にて迂闊の至なりしなり。即ち上空戰斗横は之より先敵戰斗機の一群二十四機が南航の途中より引返し來るを發見し、降下中攻隊に警告せんとする時、一番機も敵を認め何等の餘裕なく急降下ジャングルすれすれに下りたるものなる事後より判明す。茲に於て初めて搭乘員は戰斗配置に就き、砲門を開き射擊準備をなす。吹き入る風操縦する機銃等一時雜音交る。

六、機がジャングルすれすれに高度を下げたる時、既に敵機と我護衛戰斗機との空中戰は展開せられ、數に於て四倍の敵は容赦なく大物たる中攻機に迫る。之に對して機は急速九十度以上の大回避を行ふ。機長は上空を凝視し、敵機の突込まんとするを見るや、主操縦者の肩を敲きて左右を指示せり。一番機は右に、二番機は左に分離し、其の距離を増せり。二回程回避の後一番機や如何と右側を眺むるに何たる事ぞ、約四千米の距離にジャングルすれすれに黒煙と火を吐きたる一番機が速力も落ちて南下しつつあらんとは、しまった！の考の外なく餘の斜後通路に立ちありし室井航空參謀の肩を引き寄せて「長官機を見よ」と指示せり。之彼との永遠の別離とはなれり。此の間僅に二十秒位、敵の來襲に機は又急轉して長官機を見失ふ、水平に歸るももどかしく如何なり行きたらんと心は憂に滿

つ、當然の結果は豫想しある所なるも――次の一瞥に機影既に無く、ジャングル中より黑煙の天に沖するを認むるのみ。噫萬事休す！

七、此の時、我機は全速力を以てモイラ岬方向に向ひ間もなく海上に出でたり。空中戰斗は最初一番機の方面に於て盛にして、右後方を眺むれば兩者の格斗を遠見し得。胴體且型のP38が上昇ハーフターン、急旋回して我機に迫る。來た！我機銃は後方より追躡する敵機に向け喰ふか喰はれるかの戰斗となる。發砲音見事なるも我射線尚近にして命中せざるか、彼は其の優速を利して急速に近接其の射彈は敵乍ら見事に我の右側左側に平行集中し、時々機體に命中するを感ず。最早や如何ともなし難く「最後」近しを覺悟す。此の時機我機銃發射の音も減じ、指揮官の聲も無し。相當に機上戰死を遂げたるものと判ず。室井參謀は卓上に手を擴げうつ伏せになり居たるを以て、早くも敵彈命中機上戰死したるものの如し。（後より主計長の目視談）

八、餘の前に坐せる主操縱者は右翼に命中彈を感じ、不時着用意の為下舵をとり高度を海面近くに下げんとせり。自らは氣附かざりしも、上空に在りたる味方戰斗機は此の時機二番機も黑煙を曳きたるを目視せりと云ふ。主操縱者は高度を下げ終りて水平に復さんとせるが、此の時既に操縱の自由を失ひ、直に全スロットルを絞りしも如何ともすべからず、機は全速を以て俯角の儘水中に突入すると同時に左に九十度以上轉覆せり。

九、墜落か不時着かは當然覺悟し、幾分突張り氣味の構に在りしを以て突入の際は別に異狀無かりしが如きも、瞬間的轉覆の為餘は指揮官席よりもんどり打つて機内の通路に轉覆せり。負傷の大部は蓋し此の時なるべしと考ふ。轉覆と同時に四圍暗黑、海水の相當の勢を以て全身を襲ふを感ず。處置全く無し。之を以て宇垣の最後と自ら引導を渡したり。凡て終れる心境にて何も頭に浮ばず、焦りも足掻きもせぎりし樣覺ゆるが確實を缺く。

（意識を失ひたりとも考へられず――水等全然飲み居らず――次の瞬間まで眞に僅小の時間に過ぎざりしものと判定す）自ら引導を渡して觀念せる直後、眼前パッと明くなれるに驚き眺むれば身體は奇しくも水面に浮びあり。何たる奇蹟ぞや！機體は既に沒し右翼は我直後に逆立して炎々と燃えつつあり。附近人影なし。あゝ我助かりて未死せずとせば此儘に在るは危險至極なり。海岸迄は二百米足らず、全身何となく變に覺ゆるも尚泳ぎつく自信あり。よし泳げと決意す。但し老骨なれば無理をして精力を消耗する事あるべからずと自を教へたり。

一〇、此の時戰斗帽は頭上にあらず、右半長靴も自然に脱しあり。殘る左足の靴邪魔なり。仍て水中に蹴飛ばす美事に脱げたり。日頃左足はよく痙攣を起し、上甲板上のデッキビリアードにせよ、陸上の出獵時にせよ、時々困惑したる事ありしも此の時幸なる哉何等の異常を來さぎりしは後より考へ幸運と申す外無し。邪魔物は既に全部を脱したり。悠々平泳を以て海岸を目標に進み、時に後を顧みて、機は尚炎上を續くるも人影更に無きを確む。生存を餘輩一人のみと感じたり。

一一、約七、八十米進みたる頃眼前に箱相次で流れ來るに會す。二個は荒削にて小型なるも一個は鼠色に塗粧せる確に要具箱なり。（何れも機體中より流出せるもの）天與の助舟！同じ捉ふるならば可成大型に如かずと其の鼠色の一に右手を掛けたり。然るに力一向に這入らず如何したと右手を眺むるに手首はだらりと下りて鮮血したたる。ハハア右手は折れて居るなと此の時始めて氣附く。右手のみにては不安心なれば左手をも添へたり。茲に於て推進力は足のみとなる。此の時に至り我前方を飛行帽子を冠りたる搭乘員一名が元氣に泳ぎ行くを發見し、中聲を以て「オーイ」と呼びたるに彼後を振り向き餘に氣附たるも其の儘陸岸に向つて前進せり。箱につかまりて餘裕あり。後を見るに翼は尚燃えつつあるも全體は沈下し激流に流されつつありと感ず。

一二、海岸に近寄るに從ひ潮流益々強く二節以上もある樣に見ゆ。箱を押して足のみの水掻きにては横流れのみ多くして目標とせる前面の大木徒らに横に過ぐるのみ。騒ぐ要なし。潮あらば潮を利用し何時しか達岸の目的を達すべく至極落着きたる氣分鼻歌の一も歌ひ度心地なり。此の時モイラ岬方面より兵員らしき者四名駈け出しジャングルと砂濱との境を當方に近より、時に小銃發射の銃聲二發を聞く。眼はかすみかかりたる樣にて充分判別し難きも、我占領地なれば我友軍に相異無き筈敵ならば輔へられざる樣自沈の外無しと注視す。丁度此の時我より先に游泳し行きたる搭乘員海岸に到着し彼等と會し沖を指し又我存在を教へたるが如し。（之等兵員の最初の行動に就き兵舎に収容の後聞ひ訊せるに口を緘して一言も發せず。恐らく敵機を繫墜し其の搭乘員の上陸を警戒し、要すれば射殺か捕虜にせんとしたる樣子なり。味方重要機と知らざれば當然の處置とも見るべし）

一三、兵員の一名徐に着衣を脱し水に入りて我に近寄る。十米附近となりたる頃餘の參謀飾緒を発見したるものか陸に向ひ「ア參謀だ、參謀だ」と頓狂の聲を發したり。それ迄オッカナビックリにて近寄れる彼急に勢を得て我體を押す。「待て俺は負傷しているから此の箱を推せ」と命じ彼之に從へり。其の内他の一名も海中に入り助力して海岸に到達せり。

一四、兩機共悲慘の結果に終り、長官以下多数有為の幕僚を失ふ。生けるは我のみ。速に爾後の處置を講ぜざるべからずと痛感せるも、渚に上りて尻をつき一休みするの外無かりき。此所より兵舎迄十五分行程と聞きいざ行かんと立ち、兵員に支へられてカンカンと照り附く砂濱を無帽濡れ鼠にて歩を運ぶ。暑さと疲勞にて眼グラグラす。丁度よし、戸板を持ち來り呉れたれば之に乘り、擔かれて樹蔭に在るトタン張りの兵舎に着く。右腕は衣を割きて裸體となり舎内の假床に横はる。直に陸軍衛生兵の應急手當を受け副木等も宛て仲々處置適當なりと感ず。

（註）モイラ岬には八糎砲四門あり海軍根據地の手不足なろにより陸戰隊の十五名の外陸軍より派兵しありたる由なり。

應急手當中、第一根據地隊司令官に電話し「本事件に關する報告は親展電報を以て必要最少限度に止むべし。參謀長より」と命じたり。尚主操縱員は頭部に微小のかすり疵ありしのみにて、狀況を電話報告して歸舎せるを以て、二號機には多數の搭乘者あり其の漂流沈沒位置を確認し、爾後捜索に便ならしむる様命じ海岸に向はしめたり。

一五、一落着したる後は慾が出るものと見え渇を感ず。水は飲用に堪へずと云ふも何か持ち來りて飲ませ呉れたり。甘露正に甘露なり。次に煙草は無きやの問に對し金鵄か譽様のものに點火し呉れたり。ラボールの宿舎を出發以來初めてなれば之も亦味よし。何ぞ其の良否を問はん。我の外に助かりしは主操縱者のみと心得ありしに、此の時分「主計長が助かりました」と報告するものあり。「疵は如何か」の問に對し「兩眼つぶれ咽喉に大穴あり」と答ふ。そは重傷なりと考ふる内に餘の枕許近く運び込まれたり。起きるに堪へず。横臥の儘にて「主計長！」と呼ぶ。「アーン」と返事す。「しっかりせよ」「アーン」と云ふのみにて元氣なし。出血多量にては生死如何と氣遣ひたる程なり。

一六、本事件の第一報は空中戰斗に依り敵數機を撃墜したりと稱する護衛戰斗機中の一機故障を生じ、バラレかブィンかの基地に先行着陸せるものより齎され、次でモイラ岬よりの電話報告に接したるが如し。根據地隊司令官は長官一行出迎の為驅潜艇にてバラレ基地に在り。同根據地隊司令部は直に軍醫長及司令部附軍醫官を驅潜艇にてモイラ岬に派遣し呉れ、應急手當終了後四五十分の後來着、全身に對し相當の手當をなし呉れたるは手廻しよき事と感謝するなり。主計長を先にする様云へるも矢張り我より始めたり。餘の手當を終りて主計長の手當を施しつつある時「如何か」と軍醫官に聞きしに「眼も喉も大した事はありません」との答に餘は大に安心せり。

一七、一方不時着機體の捜索は此の時始められたるか如し、詳細は知らず。一應の手當終了せるを以て一服の後擔架に移され、本陸戰隊の指揮官たる特務少尉に禮を述べ大發を介して、驅潜艇に移さる。赫々たる太陽上に在り、擔架にて移さるる如に兵員何れも顔を覗く。矢張り見度ものと覺ゆ。驅潜艇は根據地隊司令部前の棧橋に到達、艇長と覺しきに目禮して下船、患者運搬車に載せらる。此の時板垣根據地隊司令官と初めて車窓を通じ會ふ。餘の言は「色々御厄介をお懸け申す。我々兩人は大した事無し。それよりも長官機の収容及二番機搭乘者の捜索に全力を盡され度」惡路をゆるゆると牛の如くに動き車窓大樹のすくすくと伸びたるを眺め乍ら病室に着く。木造の小室に運ばれ、之まで裸體の上に何か白布をかけたる儘なりし體に病衣を着す。移動レントゲンにて右手挫折部の撮影を終りて少憩後、根據地隊司令部に移さるる事となり、再び病院車の人となりて椰子林中の士官寢室に輕便寢臺上の人となる。マラリヤ多ければ晝間も青き蚊帳を卸ろす。司令官來室兩機共極力捜索収容に努めつゝありとの事なり。司令部の大損害後の處置及餘自體手當の便よりラボールに歸還方慫慂ありたるも、餘は「善後處置は首席參謀も殘りあり。南東方面艦隊司令部も在れば何とかなるべし。長官のお供をし來りたろ身が其の後始末を了せずして歸るに忍びず、御厄介乍ら此の地に在りて収容を挨つべし。尚本事件に關する通信は發信前當參謀長の同意を得る様取計はれ度」と答へたり。此の夜色々の注射を受く。食慾は果物の外無く、此の時機より放屁戰は猛烈に始まれり。

一八、負傷箇所左の如し

頭部上及後側に四ケ所のかすり傷。

左眼中に小疵　周圍はれ上る。

顔面口の右上及口邊に疵多數、血のかたまり點々。

背中及臀部に擦過傷數ケ所。

右下膊部挫傷、複雑骨折。（尺骨動脈、主静脈切断）
左不肢向ふずねに數ケ所の挫傷。
（歸艦後發見）左背下より二番目肋骨々折。

以上の如く數々あるも何れも急所を外れたるは何たる幸福ぞや。

後記

一、一號機の墜落位置は飛行機の捜索に依り同日中に確認し、機體の焼損を報告せしも人影を認めず。

二、ボーゲンビル島西岸に道路工事中の陸軍部隊に飛行機墜落を逸早く届け出たる土民あり。陸軍は直ちに救援隊を差し向け翌日現地に到着。海軍救援隊に先ち遺骸を収容し歸途海軍部隊に會合せり。

長官の遺骸は軍刀を握りたる儘機の腰掛の上に在り。未だ靡亂無く嚴然たりしと誠に神なり。驅潜艇にて運搬中檢視するに下顎部及肩に機銃貫通彈あり。恐らく機上に於て即死せられたるに非ずやと想像す。軍醫長は半焼にて區別し得たるも、其の他は焼損靡亂して判別し難かりしと云ふ。一方二號機の方は水深二十餘米附近にして潜水に依り極力捜索せるも、車輪、エンヂン、プロペラー、機銃及一本の軍刀等の飛散せるを發見せるのみにて、機體其の物は達に發見せず。翌日及翌々日搭乗員の遺骸二個陸岸に漂着したるのみ。

三、兩機を合し生存者は餘と主計長と二番機の主操縦者のみ。即ち長官以下幕僚搭乗員を合し廿名の犠牲なり。戰の常とは云へ餘の至らざりし所なり。後より聞く處によれば、當方面一兩日前より朝の偵察に敵は戰斗機編隊を以てするに至り、從來單機の行動に對し大に異變を認めたる處なるも、本報告は事件發生の翌日綜会報告として南東方面艦隊に致され後の祭とはなれり。本報告にして適當に到達しあらんには長官の視察を見合はすか、時刻を異にし有力なる護衛機を附するか、或は行先基地との聯繋を密にし敵機來襲の際は一時避退する等の方法も、あれ丈詮議して成立を見たる視察行なれば當然として氣附き又實行すべき手なりしものをと、悔みて尚遺憾とする處なり。南方に歸還しつつありし敵機群が我を認めて反轉來襲し來る。茲に數分の差が彼我の行動間に存在したりとせば、本事件の如きは夢想だにせず、順調に經過したりしならん。全くのチャンス運命とや云はん。同時に戰さに於てば豫期せざる事の生起を考へ置く事肝要にして、警戒は常に當然以上のものとし撰まざるべからず。

四、主操縦者の生存は疑問無し。主計長は餘の反對側の作業卓に腰掛けありて眼鏡等により顔面に負傷せるも左轉覆の後は上窓より脱出し得る筈なり。餘に至りては通路に轉覆し全く暗黒になれるより見れば操縦席の下邊まで前進的に落ちたるべし。而して處置なく引導迄渡せる者が次の瞬間水面に浮びある奇蹟を何として解くべきや。航空艦隊司令部参謀等其の道の識者に問ふに、突入時機速の為機體の前部破れ、裂目上向きとなり茲に水壓と共に丁度脱出出來たるものなるべしと理屈附く。機上敵彈も命中せず、轉覆に當りて最惡の場所に陥り、而も何等苦勞なく水面に浮き出づ。之を神技と云はずして何ぞや。最惡の場所は神より云へば最良の助け場所即ち導きなりしなり。若し夫れ轉覆時打ち所惡ければ夫れまでなるのみなるが、負傷の箇所は全て急所をはづれ云ふに足らず。

編上靴と革脚絆に代ふるに借用の半長靴を着用し行きたる、搭乗後直ちに長劍を脱したる、（長劍のみ我身代りとなり南海の海底に沒したり）、左靴を脱するにコプラの上らざる、游泳中眼前に木箱の流れ來れる、墜落場所の我占領地にして至近に我部隊駐屯したる、主操縦員の我に先行して陸岸に達せる。収容後直に陸軍衛生兵の應急手當を受け得たる、外科の大家にして同縣出身の根據地隊軍醫長の即刻の來診を得たる外、現地に於てギプスを三日目にかけ得たる、皆之れ幸運の數々にして神靈は餘を助けんとして凡有の方策を執られたるものと觀る外無し。豫て長官の身代りたらんと覺悟せる身が、長官を失ひて反りて生還す。意外又相濟まざる處なるも、之れ神意に基くものと觀念し生きて働く可き道に遺憾なく、此の仇を返し以て神靈に答へんとはするなり』

（註三十九）一九四三年四月十七日、ガダルカナル島のヘンダーソン飛行場附近にあつたソロモン群島方面空軍司令官に宛てて一通の極秘密電報が届けられた。その電文には山本聯合艦隊司令長官の日本軍基地巡視の詳細な豫定が記され、明朝山本長官が一式陸攻で午前九時四十五分ブイン到着の豫定である。司令官は之を撃墜する為最大の努力をなすべき旨命命されたのである。そしてこの電文の最後には海軍長官フランク・ノックスの署名がしてあつた。この命令は當時ヘンダーソン飛行場に駐屯中のジョン・W・ミッチェル少佐指揮の陸軍P三八「ライトニング」戰闘機隊に下つた。ミッチェル少佐はブ

インの西北三十五哩の地點で邀撃することに決定した。翌早朝P三八、十八機はこの任務のため出發したが二機は故障引返し、十六機を率いたミッチェル少佐は海面すれすれの超低空飛行で目的地に近寄り豫定の五分間に急上昇でランフィアー大尉指揮の四機は三千米、他の十二機は六千米に昇つた。午前七時三十四分、日本の陸攻は戦闘機六機を以て現れた。ランフィアー大尉は反撃する日本戦闘機の先頭機に向つて襲いかかつた。彼の目測ではこの時樹上わずか十呎の超低空だつたが、彼は攻撃機隊の編隊に向つて直角に猛射を浴せかけた。一番機は直ちに右エンジンと右翼から火を噴いてジャングルの中にもんどり打つて突込み、焼失した。次にレックス・パー中尉機は二番機を撃墜した。米軍の損害は一機、此日ガダルカナルでは盛大な凱旋祝賀會が催された。然し米軍は日本海軍の暗號解續の事實を秘する為にこの事實は宣傳されなかつた。（中野五郎著「かくて玉碎せり」中山本元帥の怪死）この時、敵の讀んだ暗號が果して海軍暗號書だつたか、それとも當時現地陸海軍部隊が編纂使用してゐた薄弱な戦術暗號だつたか、これは今日猶詳にする術はない。然し通信關係者の不注意がこの悲劇を生んだこと丈は紛れもない事實である。

山本長官

（附記）巨星墜ちて全軍寂として聲無し。全軍將兵の輿望を負うて立つた山本元帥の戦死が内外に及ばず影響を懼れた大本營は、二十五日新長官古賀峯一大將着任後もその喪を秘し、五月二十一日遺骨が武蔵で東京灣に到着の前日始めて之を發表したのであつた。

靖国神社初詣の記

田中　賢一

一月二日靖国神社初詣で、数年前までは元日零時に詣でたことも何回かあつたが、もうその元気はない。天候に恵まれ、午前中に出かけた。若い參拝者が多いのは嬉しい。それにつけても敗残の老兵の思いはまた格別。

この奥に友垣あまた鎮まるを
　思えばなどか胸せまりくる

二礼二拍手一礼の後、しばし佇み奥宮を見つめていると、何か霊感を覚える。若くして国に殉じた戦友達。

富む春秋国に捧げし英霊に
　済まぬ思いの八十路かな

浮かび出ず匂うが如き若武者の
　み前に我は辿り来りぬ

〃はなればなれに散らうとも
　花の都の靖国神社
　庭の梢で咲いて逢およ〃

ほの暗い裸電球のもとで茶碗酒傾け
歌ったあの横顔

君が霊何処の枝に宿るらむ
　大和心のこもる桜木

幽明の境除かるこの庭の
　居並ぶ木々に霊こもるらむ

白き鳩君が心をはばたきて
　清く直きと我は覚りぬ